

平成25年度
ゼミ学生地域貢献推進事業成果報告書

平成26年3月
大学ネットワーク静岡

目次

1. 静岡英和学院大学 人間社会学部 岡部ゼミ
古民家再利用による地域ネットワーク推進活動・・・・・・・・・・ 1
2. 静岡県立大学 経営情報学部 国保研究室
学生の地域参加による草薙地域活性化活動
(通称：草薙地域コラボプロジェクト)に関する研究・・・・・・・・・・ 6
3. 静岡大学 教育学部 塩田研究室
清水駅前銀座商店街と連携した「お仕事体験プログラム」の実施と普及・・・・・・・・ 10
4. 常葉大学 法学部 柴ゼミ
「地域活性化－商学連携による大学とまちのつながりの創出」に関する研究
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
5. 静岡大学 理学部 北村ゼミ
伊豆半島南部で過去 1500 年間に起きた大地震の研究・・・・・・・・・・ 18
6. 静岡理工科大学 総合情報学部 三原研究室
メロンのブランド名が消費者に与える感覚とブランド力強化の課題
－袋井市農産物のブランドエクイティ構築とマーケティング活動に関する研究－・・ 22
7. 日本大学短期大学部（三島校舎） 食物栄養学科 室伏ゼミ
伊豆市月ヶ瀬梅組合と連携した新たな梅製品の開発・・・・・・・・・・ 27
8. 浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 土倉ゼミ
学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究・・・・・・・・・・ 31
9. 静岡県立大学 国際関係学部 小針ゼミ
県内観光地における韓国語標識・印刷物の問題点に関する研究・・・・・・・・・・ 36
10. 静岡県立大学 国際関係学部 小幡ゼミ
静岡県立大学国際関係学部小幡ゼミと旧富士川町との学術・地域文化交流に関する研究
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
11. 静岡文化芸術大学 文化政策学部 船戸ゼミ
静岡県浜松市の中山間地域における集落の現状と課題
－浜松市天竜区春野町を事例として－・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
12. 静岡産業大学 情報学部 堀川ゼミ
中山間地域活性化のための地域デザインに関する研究・・・・・・・・・・ 53

本報告書は、静岡県から「平成 25 年度大学間等連携推進事業費補助金」を受けて大学ネットワーク静岡が実施した「平成 25 年度ゼミ学生地域貢献推進事業」の成果報告を取りまとめたものです。

古民家再利用による地域ネットワーク推進活動

静岡英和学院大学 人間社会学部 岡部ゼミ

指導教員：講師 岡部 真智子

参加学生：王麗、岡本奈々、小川里咲子、
荻原愛、田内沙季、成田光彩

1. 要約

住環境と福祉のあり方をテーマとする岡部ゼミでは、古民家や民家を使って地域活動を展開する取り組みを調査し、その成果をもとに古民家で高齢者や障害者、子どもやその親が集える活動の企画を検討したいと考えた。古民家は「清水の次郎長生家」を拠点とすることができたが、「次郎長生家」の傷み等により屋内での活動は困難であった。結果、2014年1月26日に生家のある次郎長通り商店街を使って、主に地元小学生を対象とした「次郎長スタンプラリー」を開催した。「スタンプラリー」開催にあたっては、商店街会長、次郎長生家を活かすまちづくりの会、静岡市立清水小学校に聞き取り調査を行い、現状やニーズを把握した。また、スタンプラリー開催後には、参加者や商店街店主らを対象とした聞き取り調査を実施した。以上の取り組みをまとめ、2014年2月12日に報告会「地域の資源を活かした住民活動に関する調査報告会－（古）民家活用の実践－」を行い、住民が行う地域活動のあり方について提言を行った。

2. 研究の目的

本研究では、地域に住む高齢者や障害者、子育て中の親などが気軽に参加できる場所や活動、住空間のあり方を各地の取り組みから検討し、静岡市内のある地域で、古民家を使って地域住民が集える場や取り組み（地域ネットワーク推進活動）を企画・発表する。

3. 研究の内容

1) 各地の取り組みの見学・インタビュー調査

①愛知県知多郡美浜町 日本福祉大学児玉善郎ゼミ他「美浜町空き家活用プロジェクト『お年寄りと小学生の交流サロン』見学、インタビュー調査

2013年7月26日（金） 13:00～16:00 参加学生3名、教員1名

空き家となった古い民家を活用し、小学生と高齢者、大学生が交流するサロンを見学した。交流サロンでは、50名近い大学生と地元小学生、比較的若く活動的な高齢者が集まり、グループに分かれ、昔の遊びや地元をテーマにしたクイズ大会が開かれた。運営している大学生にインタビューをしたところ、この古民家は普段雨戸が占められているため、サロン活動の日には雨戸を空け、清掃し、庭の草むしりなどから始めるという話が聞かれた。また、サロンに参加した高齢者からは、地元で有名なこの民家を一度見てみたかったから

参加したという声が聴かれ、古民家そのものが参加者を呼び込む資源になっていることがわかった。



②古民家活用型デイサービス「デイサービス花桃」、「デイサービス秋桜」見学、インタビュー調査 2013年10月19日(土)10:00~12:00 参加学生3名、教員1名

「デイサービス花桃」で施設長にインタビューを行ったところ、デイサービスの経営者はかねてより古民家を使ってデイサービスを開くことに強い関心を持っており、デイサービス花桃の前にも近隣の別の古民家でデイサービスを開いていたという。改修は行われているものの、バリアフリーになってはいない。物理的な障壁があることで、利用者に職員が寄り添いながら乗り越えている。これにより、職員が常に利用者の様子を見守ることとなり、また利用者に直接接する機会も多くなっているという。



③「コミュニティスペースりぼん」見学、インタビュー調査

2013年11月8日（金） 15:00～17:00 参加学生2名、教員1名

小学校でPTA活動をしていた島田圭吾氏が、商店街の空き店舗を借りて始めた取組み。小学校帰りの小学生が宿題をしたり、親の迎えを待つことができる場所である。駄菓子や学校で使うノートなどを販売している。小学校に併設されている学童保育は人数制限があったり、利用するのに高額な費用がかかる。だがここは利用料金はかからず、常に大人の目もあるため、保護者にとって安心できる子どもの居場所となっている。また場所の貸し出しも行われている。



④「おおさわ縁側カフェ」見学、インタビュー調査

2013年11月24日（日） 11:00～13:00 参加学生4名、教員1名

静岡市葵区の大沢地区で、集落全体の住民（23世帯）が自宅の縁側を開放して行っているカフェである。月に2回行われるが、自分の都合に合わせて開いている。茶農家が多い集落であるため、カフェで提供されるのは、大沢茶とその家の人が作る漬物やもち、栽培している野菜などである。静岡市内から70分ほどかかる奥静にあるが、この取組みに興味を持つ人が県内各地（牧之原や清水など）から来るといふ。



2) 活動対象となる地域や地域住民の意向調査

①次郎長通り商店会 会長 吉井靖氏へのインタビュー調査

2013年12月9日（月） 11:00～12:00 参加学生6名、教員1名

次郎長通り商店街で行われる次郎長に関する祭りや商店街の歴史、現状についてインタビューを行った。結果、5月に「次郎長フェスティバル」、夏に「清水みなと祭り」で次郎長道中を行うこと、商店街は15年前には52の店舗があったものの、現在が27店舗に減少している点を把握できた。



②次郎長生家を活かしたまちづくりの会 会長牧田充哉氏、NPO 地域づくりサポートネット 高木敦子氏へのインタビュー調査

2013年12月11日(水) 16:30~17:40 参加学生3名、教員1名

インタビューの結果、生家を残していくためには、修繕のための費用が必要で現在募金活動を行っていること、市に対しては「次郎長の歴史的な評価を行ってほしい」「生家に関わる固定資産税や公共料金の免除など、配慮をしてほしい」という要望があることがわかった。



③次郎長通り商店街がある地域の清水小学校 鈴木教頭先生、コーディネーター中野氏へのインタビュー調査

2013年12月16日(月) 13:00~13:30 参加学生2名、教員1名

インタビューの結果、小学校では次郎長を主として取り上げた学習機会は設けられていないが、次年度以降検討している。3年生の総合時間で商店街を歩き学ぶ機会があることがわかった。



3) 古民家活用の地域活動

調査の成果を踏まえ、2014年1月26日(日)(清水の次郎長の名前にちなみ、26日)に「清水の次郎長スタンプラリー」を次郎長商店街の7つの店舗と次郎長生家の協力を得て実施した。50名を超える小学生や保護者、関心を持った方に参加していただき、次郎長に関するクイズを解きながら、スタンプラリーを行った。終了後参加者にとったアンケートからは、85.7%から次郎長を知ることができた、91.8%が次郎長生家にまた来たい、と考えていることが分かった。また、小学生のみの設問からは、近所の人と挨拶をするのは80.5%で、家族以外の大人と交流を持ったことがあるのは46.3%にとどまることがわかった。この取り組みは、静岡朝日テレビの夕方のニュース番組でも放送された。

4) 調査協力地域、県内の社会福祉協議会、自治体向けに調査結果の報告会

2014年2月5日、12日(水) 13:30~16:00 参加学生5名、教員1名

上記日程に、報告会「地域の資源を活かした住民活動に関する調査報告会－(古)民家活用の実践－」を開催した。われわれが見学した美浜町の取り組みを行う日本福祉大学の児玉善郎教授に講演を依頼し、その後、ゼミで行った調査や「次郎長スタンプラリー」に関する報告を行った。県内の全社会福祉協議会に案内を送付したところ、県社会福祉協議会、市町の社会福祉協議会(2か所)、静岡県、調査を行った老人デイサービスセンター、学生らの参加を得た。報告会の最後には質疑応答の時間を設けた。実際に地域の居場所づくりを展開している方々が参加してくださったため、活発な意見交換も行うことができた。



5) 報告書作成

2月12日の報告会では、パワーポイントを用いた発表であったが、あわせて参加者には活動の詳細を記した報告書を配布した。

また、参加が得られなかった県内の社会福祉協議会、調査協力先、この活動に関心のある方々に報告書を郵送で送付した。

4. 研究の成果、地域への提言

今回の取り組みを、研究の成果として報告書にまとめた。

住民が行う地域活動では、歴史性や物理的なだけでなく社会的な意味も含めた地域の資源を自分たちが理解し、それを活かして、住民同士がつながりながら、無理のない、気軽に参加できる活動を展開することが大切である。

5. 地域からの評価

報告会の開催を県内の社会福祉協議会に案内したところ、伊豆の国市社会福祉協議会から、ゼミ教員に対し、サロン交流会の全体会を行う際にコメンテーターとして協力してほしいと依頼があった。また、報告会に参加してくれた静岡県、静岡県社会福祉協議会からは、「居場所づくり全体交流会」への参加が呼びかけられた。古民家ではないものの県内各地で交流サロンや居場所づくりが展開されており、そうした活動に関心を持つ人たちから声がかけているということはこの活動が地域のニーズに沿った一定の評価を得たものであると考えられる。

学生の地域参加による草薙地域活性化活動（通称：草薙地域コラボプロジェクト） に関する研究

静岡県立大学 経営情報学部 国保ゼミ

指導教員：助教 国保祥子

参加学生：4年 大崎瑞穂

2年 石川史奈、小林祐介、西美有紀、星野遼介

1年 荒岡大紀、神村海里、相良竜我

1.要約

地域コラボプロジェクトでは、静岡県立大学が位置する草薙における、学生の地域参加による地域活性化を目的に活動している。この地域コラボプロジェクトの参考にするため、他地域のまちづくりや活性化のための活動の視察を行った。今回視察の対象としたのは、伊豆を拠点にして地域活性化事業を行う株式会社 toiz と、まちづくりの先進地域である長野県小布施である。これらの視察を通して、草薙における学生の地域参加による地域活性の展開を検討した。

2.研究の目的

草薙地域は、静岡県立大学(谷田キャンパス)と常葉大学(瀬名校舎)が存在し、学生が通学や下宿のため多く存在しているにも関わらず、学生の、地域商店の利用や地域活動への参加が乏しく、草薙商店会や自治会組織の衰退などが課題となっている。また、学生は、大学や家庭など、限られた社会での生活をする事になり、大学での講義で得た知識を活かす場がない場合が多い。学生と地域商店や地域住民とが関わり、お互いに楽しさや新しい価値観、学びといった価値を提供し合う関係を作ること、これらの課題を解決する活動を行っていくにあたり、他地域の事例を参考にし、今後の活動の展開を検討することを目的とした。

3.研究の内容

今回視察に訪れた訪問先は以下の通りである。

- (1)株式会社 toiz
- (2)小布施町役場
- (3)小布施町内の散策

4.研究の成果

(1)株式会社 toiz H25年12月7日～12月8日

株式会社 toiz(静岡県伊豆市柏久保1311)は伊豆を拠点にして地域活性化事業を行う企業である。伊豆の活性化を行っていたサークルのメンバーであった大学生が起業し、経営している。toiz の主な事業は地域プロモーション事業、ゲストハウス事業、IT 事業、教育事業の4つである。地域プロモーション事業は、広報誌の制作や SNS を利用した情報発信、地域の伝統行事への他地域の

学生の誘致などを行っている。IT 事業は、三島のまちあるき用のアプリの開発などを行っている。教育事業では、小学生から大学生まで、幅広い年齢層に対応したワークショップや勉強会などを開いている。伊豆は大学がなく、普段は学生がいない地域であるが、toiz の事業によって、主に関東の学生を伊豆に呼び、伊豆で楽しい経験をさせる。社会人になってもまた伊豆にいたいと思ってもらうことが狙いである。これらの toiz の事業活動について具体的にどのような活動を行っているのか、その際の苦勞や工夫などを同社取締役の大塚眞氏にヒアリングした。またそこで学んだ問題解決のために原因を細かく分析する手法を生かして、草薙モデルを検討した。

事業	概要
地域プロモーション事業	地域に学生を誘致するイベントの企画など
ゲストハウス事業	修善寺にてゲストハウスを運営
IT 事業	まちあるきアプリの開発やウェブページ制作など
教育事業	小学生～大学生に対する教育事業

表 1 株式会社 toiz の主な事業

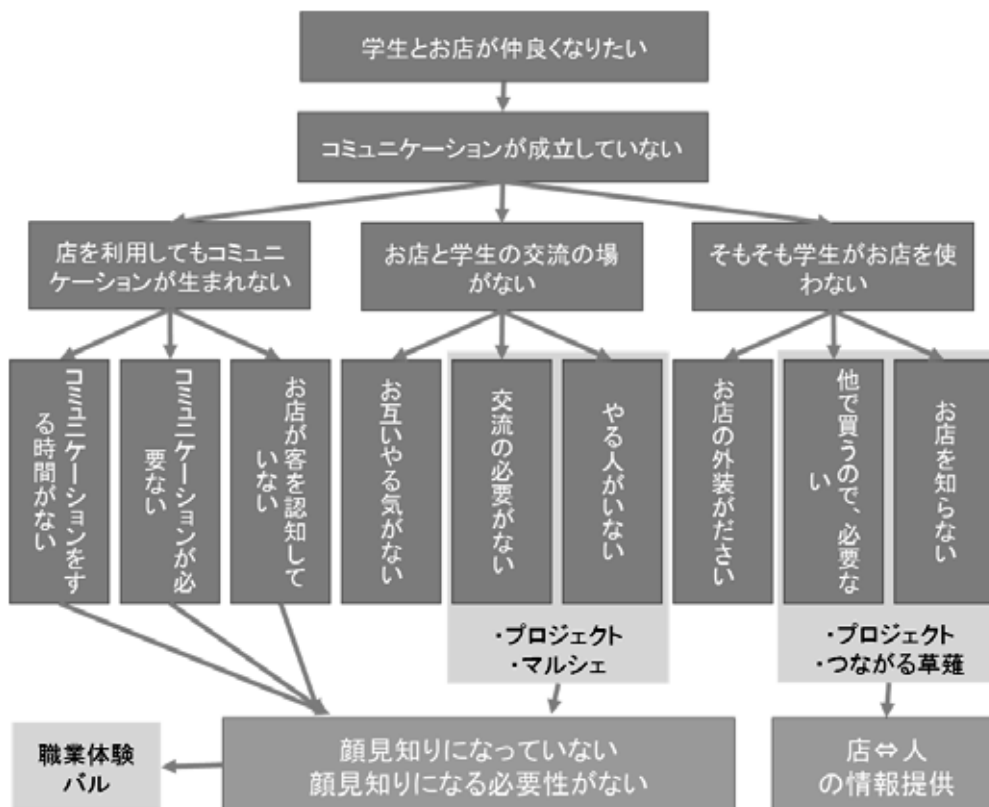


図 1 原因分析の草薙モデル

(2)小布施町役場 平成 25 年 12 月 22 日

町民、研究機関、大学、地場企業、町外企業などといった様々な主体と共にまちづくりを進めている小布施町（長野県上高井郡小布施町大字小布施 1491-2）を訪問し、小布施町役場行政経営部門行政改革グループの宮崎貴司様にまちづくりの歴史と現在の取り組みについて伺った。

まちづくりがスタートしたのは人口の減少を止めるという目的があり始まったそうだ。具体的にやったこととしては北斎館の建設、街並みを統一する事業のスタート、花によるまちづくりである。自分達が普段聞けないハードの面でのまちづくりにも触れることが出来た。

学生と地域の関係で考えると小布施と草薙と違う点は高校大学がないということがあげられる。小布施には小中学校まではあるが、高校大学は存在しない。いわゆる過疎地域である。しかし小布施には大学生が集まっている。それには町に学生が来る工夫がされているからであった。例えば自由に小布施の町民と話ができ、ホームステイを気軽にできるようになっているところだ。また小布施の町役場には来た大学生が研究できる場が整っている。町役場には「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」や「法政大学・小布施町地域創造研究所」の事務所も設けられていた。これに関わっている学生はゼミ活動として研究しているらしく、定期的に小布施を訪れる。他にも立教大の学生を受け入れる体制が整っているのは小布施町の強みである。

また住民もオープンガーデンという自宅の庭を開放し観光客に見せて楽しんでもらうというサービスを行っている。企業との関わり方についてだが老舗の企業もオープンガーデンに参加するなど積極的に地域と関わっている。今回のヒアリングでは産・学・官・民それぞれが1つの方向に向かっていく姿勢に魅力を感じた。



写真1 役場での記念撮影

(3)小布施町内の散策 平成 25 年 12 月 23 日

小布施を歩いてみると町の人々の優しさに心惹かれた。おすすめのお店を問えば間髪入れずにマップを開いて「このお店が有名」と教えてくれる。さらに同じ業界のお店のことまでも紹介してくれる。町のお店1つ1つが観光案内所の役割をはたしているのが、このまちの魅力の1つだと感じた。オープンガーデンに関しては普段行けないようなところに行けるという事が自分たちに

とって新鮮であった。これは草薙にも言えることで、街を案内する時にどうすれば驚きや発見を見つけられるかのヒントになった。お店の外観が統一されているのにも驚いた。その効果により町全体に統一感がでて、たとえ合わせていないお店があったとしても気にならない。町に迎えられているような気分になる。



写真3 交番まで統一感がある



写真4 町並みの散策

5.今後の草薙の学生の地域参画による活性化の展開に関する検討

視察をもとに、今後の草薙地域に学生がどのように関わり草薙の地域活性化を行っていくのかを検討した。その結果、以下の3つの論点が抽出された。

- ・ 大学がある草薙という地域では小布施よりも学生を引きこむのは容易である。そこで地域コラボプロジェクトがハブの役割を担い地域と学生をつなげる存在となる。
- ・ 学生や住民、商店など、様々な世代の人々が関わりあい草薙について話し合う場を創出する。
- ・ 住民や学生など草薙の利用者が主体的にまちづくりを進めるための勉強会の機会を作る。

これらの論点を踏まえ、草薙における地域コラボプロジェクトの活動に今後活かしていきたいと考えている。

以上

清水駅前銀座商店街と連携した「お仕事体験プログラム」の実施と普及

静岡大学 教育学部 塩田研究室

指導教員：講師 塩田真吾

参加学生：柿沼明（教育学研究科 修士1年）

伊藤亜佑子・山口聖菜（教育学部4年）

竹村百花・杉本海奈（教育学部3年）

1. 研究の背景及び目的

現在、子どもたちの職業観・勤労観を育むキャリア教育の重要性が指摘されている。こうしたキャリア教育は、主に学校教育を中心として行われているが、学校教育だけでは多様な職業観を育成するのは難しく、地域社会との連携が重要となってくる。

他方、地域の商店街には、様々な仕事があり、子どもたちがそれらを体験することは、子どもたちのキャリア意識の醸成だけでなく、商店街の活性化という面にも大きな意義を持つ。そこで本事業では、教育学部の学生が中心となり、清水駅前銀座商店街とともに、子どもたち向けの「お仕事体験プログラム」を実施し、その成果をもとに普及のためのシンポジウムを行う。このことで、子どもたちのキャリア意識の醸成及び商店街の活性化を目的とする。

2. 研究の内容

本研究では、子どもたちのキャリア意識の醸成及び商店街の活性化を目的として、清水駅前銀座商店街と連携した子ども向け「お仕事体験プログラム」及び商店街における「お仕事体験プログラム」を普及させるためのシンポジウムの2つを実施した。以下、その2つの内容について述べる。

2.1. 清水駅前銀座商店街と連携した子ども向け「お仕事体験プログラム」の実施

「お仕事体験プログラム」（別名「はじめてのしょうてんがい」）とは、清水駅前銀座商店街と連携し、商店街ならではの特徴を活かした小学生向け体験型事業である。

事業の内容は、1年生から3年生の低学年と4年生から6年生の高学年で分かれている。低学年は「はじめてのおつかい（以下、おつかい編）」として、子どもたちがお題として与えられた商品を、商店街のお店で探して買ってくるという活動を行った。お題の商品が分からない場合は、商店街で通りかかる近くの大人に尋ねるよう声をかけた。

他方、高学年では「はじめてのおしごと（以下、おしごと編）」として、子どもたちが商店街の店で仕事の見学・体験活動を行った。どちらも活動の最後には、子どもたちにその商店街でしか使えない地域通貨を給料として渡され、帰る途中に商店街で自分の好きな買い物ができるような仕組みとなっている。ここでは、主におしごと編において、について示す。子どもが体験した内容の一部を表1に、体験の様子を図1に示す。

表1 子どもが体験した内容の一部

	職種・店舗	体験内容
飲食店 宿泊業	そば・うどん店（2店舗）	接客(お茶出し・品出し・注文伺い)、調理補助、皿洗い
	台湾料理店	接客、タピオカドリンク作り
	ホテル	部屋の掃除、ベッドメイキング
卸売 小売業	着物販売店	店内清掃、着物を畳む、着物についての講座を聞く
	メガネ・サングラス販売店	目の検査、メガネのクリーニング
	八百屋	接客、野菜の袋づめ、商品の陳列
	寝具店	寝ることについての講座を聞く、まくら作りの補助
	花屋	フラワーアレンジメント体験、販売



図1 子どもたちの体験の様子

2.2. 商店街における「お仕事体験プログラム」を普及させるためのシンポジウムの実施

子どもたち向けの「お仕事体験プログラム」を普及するため、シンポジウムを開催した。本シンポジウムでは、静岡市内の全小中学校教員129名を対象として、「お仕事体験プログラム」の紹介だけでなく、静岡大学大学院の山崎保寿教授に「キャリア教育の意義と進め方」を講演いただいた。概要を表2に、様子を図2に示す。

表2 シンポジウムの概要

日時	平成25年1月24日（金）13:30～16:30
会場	「静岡市子どもクリエイティブタウン ま・あ・る」
対象者	静岡市立全小学校・中学校のキャリア教育担当教諭（129名）
主な内容	<ul style="list-style-type: none"> ○講演 「キャリア教育の意義と進め方」 講師：静岡大学大学院教育学研究科 教授 山崎保寿 ○「はじめての商店街」の事例紹介 コーディネーター：静岡大学教育学部 講師 塩田真吾 ○情報交換



図2 シンポジウムの様子

3. 研究の成果

研究の成果について、主に「お仕事体験プログラム」（おしごと編）について述べる。

おしごと編には、93名の参加者（男子22名、女子71名）があり、参加者のキャリア意識の醸成について、体験の事前と事後に質問紙調査を行った。内容については、キャリア教育における基礎的・汎用的能力の4能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）に関する項目とした。図3から図7に結果を示す。

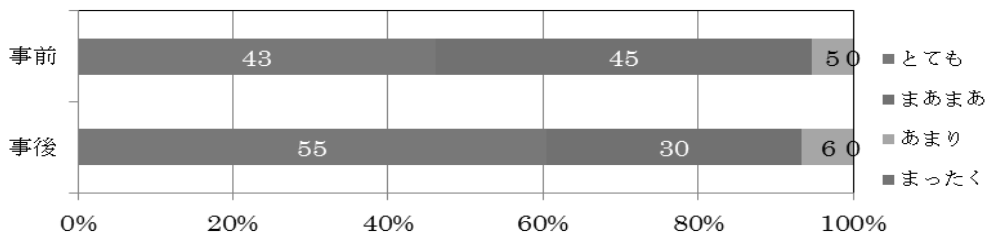


図3 生活の中で友だちや先生、大人にあいさつやお礼などができる（人間関係形成・社会形成能力）

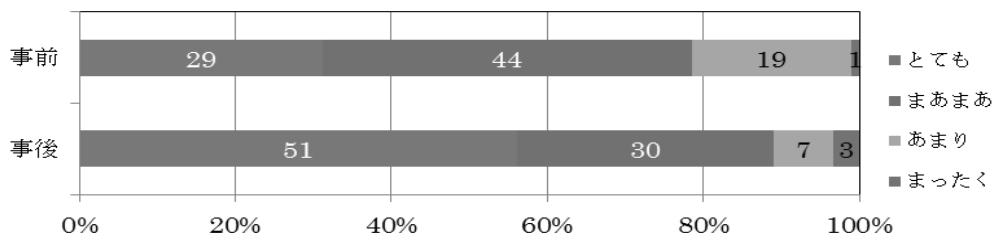


図4 わからないことがあったら人に聞くことができる（自己理解・自己管理能力）

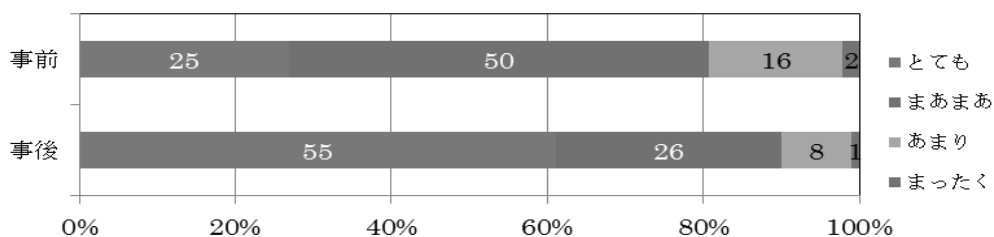


図5 やりたいことを自分で考えて自分から行動することができる（自己理解・自己管理能力）

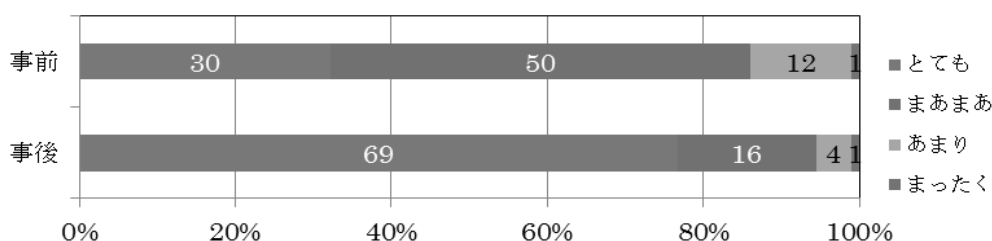


図6 難しいと思うことがあってもあきらめずに最後までやり通せる（課題対応能力）

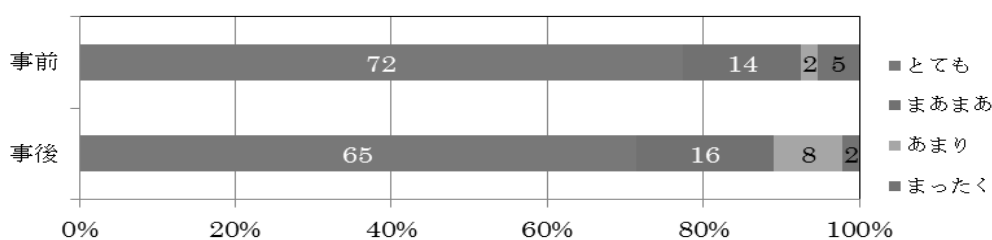


図7 将来、仕事を一生懸命がんばりたい（キャリアプランニング能力）

これらの結果より、人間関係形成・社会形成能力，自己理解・自己管理能力，課題対応能力については、体験によりキャリア意識が向上していることがわかる。特に、実際の仕事という「やや難しい課題」に挑戦することで、「難しいと思うことがあってもあきらめずに最後までやり通せる（課題対応能力）」という意識が向上したと考えられる。一方、キャリアプランニング能力については、有意な差は見られなかった。これは、そもそもこうした体験の参加者は、将来の仕事に対する意識が高いためと考えられる。

4. 地域からの評価及び今後に向けて

本事業は、子どもたちのキャリア意識の醸成だけでなく、商店街の活性化を目標とした。最後に、地域の評価について述べる。

まず、静岡市清水駅前銀座商店街振興組合からは、「子どもたちがこうした形で商店街において活動するというのは、子どもの保護者も巻き込めるので、地域の活性化につながる。」との言葉があった。子どもたちが参加することにより、普段はあまり商店街に関心を持つことがない保護者も、商店街を訪れるきっかけとなり、地域活性化に寄与できると考えられる。

また、参加した子どもたちへの質問紙調査では、97.8%の子どもが、お仕事体験活動が終了しても商店街に来てみたい（図8）と回答しており、継続的な参加が期待できる。

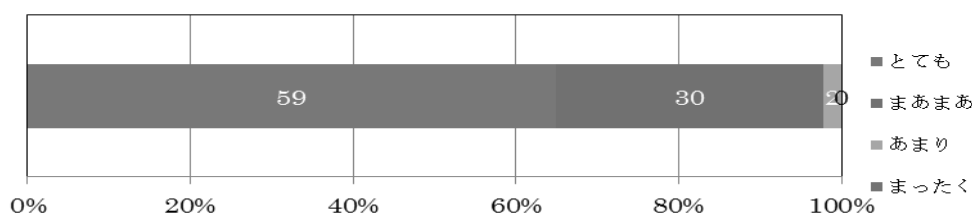


図8 はじめての商店街が終わっても商店街にきたいか n=91

今後は、こうした地域活性化の評価について、商店街利用者数の変化などの調査を行うことで、成果を定量的に明らかにしていきたい。

「地域活性化—商学連携による大学とまちのつながりの創出」に関する研究

常葉大学 法学部 柴ゼミ（研究室）

指導教員：准教授 柴 由花

参加学生：青島 有希・秋本 厚樹・石川 仁也・海野 晃・神谷 和孝・木藤 好香・小林 麻美
高島 悠歩・野村 智裕・曳野 彩音・松山 諒平・望月 克真・渡辺 杏奈

1. 要約

少子高齢化の下で、商店街の衰退が全国で目立つようになっている。しかし、商店街によっては学生と連携して活性化を図っている地域がある。商店街を活性させるためには、行政による施策だけでは限界があり、それを補完するものとして、商店街と学生とが連携して、地域を活性化させることが可能である。

2. 研究の目的

常葉大学法学部は商店街と隣接しており、商学連携による地域の活性化に貢献することが可能であると考えられる。そこで、横浜国立大学とその周辺商店街の状況を実地調査し、大学と商店街が協働して地域の活性化に取り組む方策を提案する。

3. 研究の内容

本研究では、まず、商学連携が盛んに行われている事例について調査を行った（横浜国大と和田町商店街）。次に、静岡県内の商店街の現状について実地調査、ヒアリングを行った。

（1）横浜国立大学と和田町商店街の連携の調査

横浜国立大学地域実践教育研究センターは様々な「地域課題プロジェクト」等に取り組んでおり、和田町商店街では、大学とまちのつながりを創り出す試みがなされている。

横浜国大は和田町商店街の Wit Wada（旧町内会館）をリノベーションして活動の場所を確保している。ワダヨコプロジェクトは、空間デザイン系の取り組み、和田町駅前開発計画、和田町ショッブデザイン、和田べっぴんマーケット等の企画を行ってきた。ワダヨコプロジェクトの主な活動は、商店街における週に1度の寺子屋で、勉強したい子供やお兄さんと遊びたい10人～20人くらいの児童が集まる。商店街では、キャンドルナイト、スイカ割ならぬボール割など、様々な企画を行っている。建築学部の学生は、実際に、商店街の建物のトイレの施工を行うなど、学びを実践したり、活動に参加することで単位が取得できる（初年度のみ）。初年度以降もボランティアで活動を継続する学生も多い。ワダヨコの企画は「和田町タウンマネジメント協議会」で検討される。この会は、和田町を中心とする地域の更なる活性化を目指して毎月1回、和田町で活動する人で集まり意見交換をおこなう組織である。

なお、現地調査には、静岡市まちづくり公社の堀川氏が同行して下さり、和田町商店街でのヒアリング等にあたり、適切なアドバイスを下さった。

（2）静岡県内の商店街の現状の調査

ゼミ生は、各自静岡県内の商店街に関するヒアリングを行った。ヒアリングから、高齢化によって事業を承継することが困難な商店が多いことが判明した。また、大型店については、商店街に与

える影響が大きいと思われるが、中型店（スーパー・衣料品店）については、むしろ人通りを作るために商店街から必要とされていることがわかった。商店街の活性化のために、地域の学校と連携してデザインを行ったり、イベントを行ったりする例が見られた。しかし、実際にリサーチした限りにおいては、横浜国大のようにエリアマネジメントを行うほどの関与は見られなかった。

他方、市中心街では商店街を超えた協議会（I L o v e しずおか協議会等）が作られ、学生が、企画、運営に積極的に関わっていることがわかった。

4. 活動の内容・研究成果の報告

（1）地域活動への参加

地域の活性化に資する活動に参加するとともに、上記の調査で得られた成果の発表を行った。

①ミナトブンカサイへの参加

東京大学都市デザイン研究室清水プロジェクトは、清水港日の出地区で、定期的にイベントを行っている。ミナトブンカサイは、地元市民の日の出地区やその周辺に対する理解を高め、今後の日の出地区の利活用 について可能性を示すことを目指し、石造屋根倉庫群の前面道路を会場とした賑わい創出イベントである。地元の商店や大学生と協力した露店や音楽ステージ等の企画や、夜間には倉庫群のライトアップも行っている。2012年は、会場に1500人を超える人が訪れた。2013年は残念ながら雨のため、客足は伸びなかった。常葉大学法学部柴ゼミ有志は、ミナトブンカサイ・みなとカフェにて、東京大学都市デザイン研究室清水プロジェクトのお手伝いとして、お茶等の販売を行った。



②御伝鷹（みてた）まちづくり会社との交流

御伝鷹まちづくり会社関川清明様、杉山雅一様から、商店街の歴史的背景、御伝鷹まちづくり会社の取り組みなどについて伺った。学生は、藤枝、清水、浜松の商店街について実地調査した結果を報告した。



③横内町商店街との交流

川村タオル・川村様に水落・横内の歴史についてヒアリングをおこなった。昔ながらの手法ではなく、絶えず新しいものにチャレンジすることが事業継続のコツであることがわかった。



(2) 研究成果の報告

①ミナトブンカサイを踏まえたワークショップでの報告

法学部柴研究室は、大学ネットワーク静岡・ゼミ学生地域貢献推進事業の一環として、東京大学都市デザイン研究室清水プロジェクトチームとジョイントで、「地域活性化—商学連携による大学とまちのつながりの創出」の関するワークショップを水落校舎で開催した。ワークショップには、常葉大学造形学部土屋ゼミ、I Love しずおか協議会、御伝鷹まちづくり株式会社、静岡市まちづくり公社、静岡商工会議所、静岡市、大学ネットワークから約35名が参加し、ミナトブンカサイ等、まちづくりにおける学生の重要性について討論を行った。



(静岡新聞 2013年10月25日朝刊)

②大学ネットワーク静岡の共同公開講座での報告

「浜松商店界連盟」(山下和也)、「藤枝宿上伝馬商店街振興組合」(木藤好香)、「長谷通り商店街」(曳野彩音)、「清水銀座商店街」(望月克真)についての調査内容を報告した。静岡では商店街がスーパーと共存しているなど、実際のヒアリングに基づいた知見が報告された。



5. 地域への提言～商店街を活性化させるためには

商店街振興組合法、地域商店街活性化法や条例に基づき、商店会等の組織の促進と補助金の交付によって商店街の活性化が図られている。しかし、補助金による商店街のイベントには、継続性の問題がある。また、補助金によるアーケードの撤去等については、合意形成の問題などがある。いずれにしても、補助金による商店街の活性化には限界があり、賑わいを創出するためには、継続的な人の流れを創出することが必要である。

商店街を活性化させるためには、いろんな年代の人たちが関わり合える場所、そしてお年寄のたまり場となる場所が必要である。その場所で、学生が商店街のためのイベントの企画を行うことも可能であり、また、寺子屋等を開催し、地元の子どもと接することで商店街を活性化することが可能である。そのために、商店街の空き店舗等を活用し、学生の居場所をつくることが考えられる。金沢市では、平成 22 年に「金沢市学生のまちの推進に関する条例」を制定し、町家をリノベーションして、金沢学生のまち市民交流館として、学生の居場所を確保している。

学生と商店街とが長期的に連携するにあたり、マネジメントを行う必要がある。「和田町タウンマネジメント協議会」のような協議会を定期的で開催し、商店街や他の市民団体の合意を得て、学生の企画を実行することが、長期的な活動をする上で望ましい。



金沢学生のまち市民交流館

6. 今後の地域への貢献

ゼミ学生が学部近隣の商店街にヒアリングに伺ったことで、商店街と接点を持つことができた。今後、商店街で、学生がイベント等を企画、運営することが期待されている。

大学周辺の商店街（伝馬町、御幸町、太田町、鷹匠、市民文化会館商店街等）との連携を強くして、できるだけ多くの人に商店街自体を知ってもらうため、チラシ配りの手伝いや、一番、人が賑わう夏祭りの支援を行いたい。また、空き店舗を活用して、寺子屋のようなものを作り、商店街と接していくことで信頼関係をつくりたいと考えている。

本研究を通じて、御伝鷹まちづくり会社と学生との新たな連携が生まれつつある。2014年4月に、もくせい会館にて上演される「ふじのくに 世界演劇祭」において、学生が御伝鷹まちづくり会社と連携して地域の活性化に役立つ活動を行うこととなっている。

本件「ゼミ学生地域貢献推進事業」によるご支援がきっかけとなり、ゼミ学生が様々な活動に参加して知見を広めることができ、また、地域に貢献するきっかけをいただいたことに感謝申し上げます。

以上

伊豆半島南部で過去 1500 年間に起きた大地震の研究

静岡大学 理学部 北村研究室

指導教員：教授 北村晃寿

参加学生：学部 4 年 大橋陽子

要約

伊豆半島南部の海岸には、隆起貝層(海洋固着生物のフジツボやカキなどの遺骸)が見られ、それらは地震による隆起の証拠とされてきたが、その実態は十分には解明されていなかった。こうした状況において、2013年に国は「南海トラフの地震活動の長期評価(第二版)」の中で「遠州灘～銭州海嶺付近～新島・神津島付近～相模トラフのどこかにも巨大地震の震源域に含まれる領域が存在する可能性がある」と公表した(図1)。したがって、伊豆半島南部の過去の大地震に関する研究は、ますます重要な課題となった。そこで、本研究では、大地震の実態を解明するために、隆起貝層を調査し、最近約3,000年間に4回の地震に伴う隆起が起きたこと、地震の発生頻度は最近1,500年間でそれ以前に比べて高いことを明らかにした。そして、これらの研究の成果を地域住民に周知するために、講演会と隆起貝層の観察会を行った。また、本研究では、下田市鍋田海岸において、安政東海地震の津波が運搬した津波石を発見した。

目的

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震を教訓に、中央防災会議は、2011年9月に、南海トラフで発生する巨大地震による巨大津波への対策の一助として、完新世の津波堆積物の調査が有効であるという提言を出した。さらに、2012年3月に、南海トラフで起こる最大クラスの津波の高さの予測を公表した。その中で、静岡県下田市・南伊豆町沿岸は25mとされ、8月の発表では下田市は33mに引き上げられた。一方、古文書記録にある下田市・南伊豆町沿岸を襲った大津波としては、1854年の安政東海地震と1707年の宝永地震に伴う津波があり、安政東海地震の津波高は下田市で4.4～6.8m、南伊豆町で4～5mであり、宝永地震の津波高は下田市で5～6m、南伊豆町で5mと推定されている。つまり、“あらゆる可能性を考慮した最大クラスの津波高”は、従来認知されていた最大の津波高よりも20m余りも高く、地域住民の津波に対する関心は極めて高い。こうした状況にあるが、同地域における古文書記録以前の古地震・古津波の調査は行われていなかった。そこで、2012年度に北村研究室では、静岡県と共同して、静岡県と静岡大学防災総合センターの経費で、伊豆半島南部の海岸低地と隆起貝層を対象に、古地震・古津波の履歴を調査した。その結果、いずれの地点からも津波堆積物は検出されなかった(北村ほか, 2013)。

「津波堆積物が検出されなかった」ことは良いニュースだが、調査の途上で、憂慮すべき事象が判明した。伊豆半島南部の突発的な隆起現象である。この現象の証拠は、現在の海面付近に生息するフジツボやカキなどの遺骸が、海面よりも3m余りも高い場所に見られることである。このような遺骸を隆起貝層と言う。下田市の海岸の各地に隆起貝層が見られ、1979年には石橋克彦博士(東海地震説を発表)ほか、¹⁴C年代測定から、最新の隆起は645～670年前と推定したが、その後の研究は中断していた。2012年度の調査で、北村らが隆起貝層を再調査し、西暦570～820年、1000～1270年、1430～1660年にそれぞれ0.9～2.0m、0.3～0.8m、1.9～2.2mの突発的な隆起があり、それらは地震に

よる隆起の可能性が高いと結論づけた(Kitamura *et al.*, in press). この解釈が正しいならば, 未知の活断層が 400~500 年間隔で活動し, 最後の活動から 500 年間経過している. 伊豆半島南部では, 1974 年の伊豆半島沖地震に伴う隆起量は 10cm 以下で, 地震の規模は M 6.9 である. 隆起量の観点から, 未知の活断層による地震動は伊豆半島沖地震よりも大きいと予想され, その地震への防災・減災が必要である. そこで, 本研究では次の 2 つの課題の解決を目指す. (1)大地震の実態解明, (2)地域住民の理解の促進, である.

方法

下田市の吉佐美, 入田, 多々戸, 鍋田の 4 か所の隆起貝層と鍋田海岸の巨礫に固着する海生固着動物の遺骸の高度を調査し, 試料の一部を東京大学大気海洋研究所で, 加速器質量分析装置 (AMS) を用いて ^{14}C 年代を測定した.

地域住民の理解の促進のため, 2013 年 11 月 17 日に下田市の朝日小学校において, 下田市, 静岡大学, 大学ネットワーク静岡の主催で共同公開講座「下田市と南伊豆町の大地に残された地震の記録」と題した講演会と隆起貝層の観察会を実施した.

結果・考察

吉佐美の海食洞の固着動物は 4 帯に区分され (図 2, 3), それらの ^{14}C 年代値(図 4)から, 1 帯は紀元前 1473~536 年, 2 帯は西暦 659~1112 年, 3 帯は西暦 1066~1494 年, 4 帯は西暦 1506~1950 年の間に地震に伴って隆起したと推定される. このことから, 伊豆半島南部における地震の発生頻度は最近 1,500 年間で高いことが明らかとなった. また, 下田市吉佐美, 入田, 多々戸の隆起貝層の分布からは, 過去約 3,000 年間の累積隆起量には地域差は認められないことが分かった.

鍋田海岸の波食台には少なくとも 16 個の巨礫があるが, その中の 1 つ, 高さ 2.5m, 長軸 3.4m, 推定重量 32t の巨礫には離水したフジツボやケガキの遺骸が見られる(図 5, 6, 7, 8). 年代測定の結果, 最も若い ^{14}C 年代値は西暦 1709 年~西暦 1950 年を示した. したがって, この巨礫は西暦 1854 年の安政東海地震に伴う津波によって回転した津波石と考えられる.

2013 年 11 月 17 日に実施した共同公開講座「下田市と南伊豆町の大地に残された地震の記録」と題した講演会では(図 9), 約 40 人の市民が参加し, その後の吉佐美の海食洞において隆起貝層を観察した. 参加者からは多数の質問があり, 観察会の様子は静岡新聞や読売新聞の静岡版などに掲載された(図 10, 11).

謝辞

研究助成をいただいた大学ネットワーク静岡には篤く感謝する次第である.

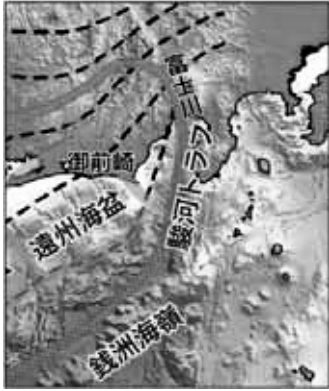


図1: 南海トラフの地震活動の長期評価 (第二版) より



図2: 地点1 吉佐美の海食洞の調査風景 (2013年10月1日 11:10撮影)

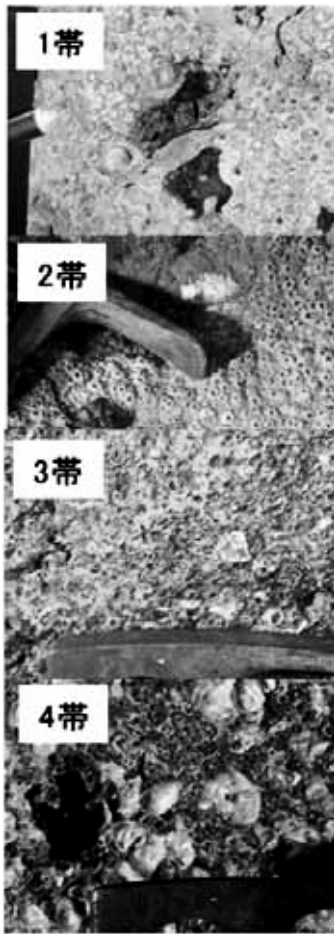


図3: 地点1の隆起貝層

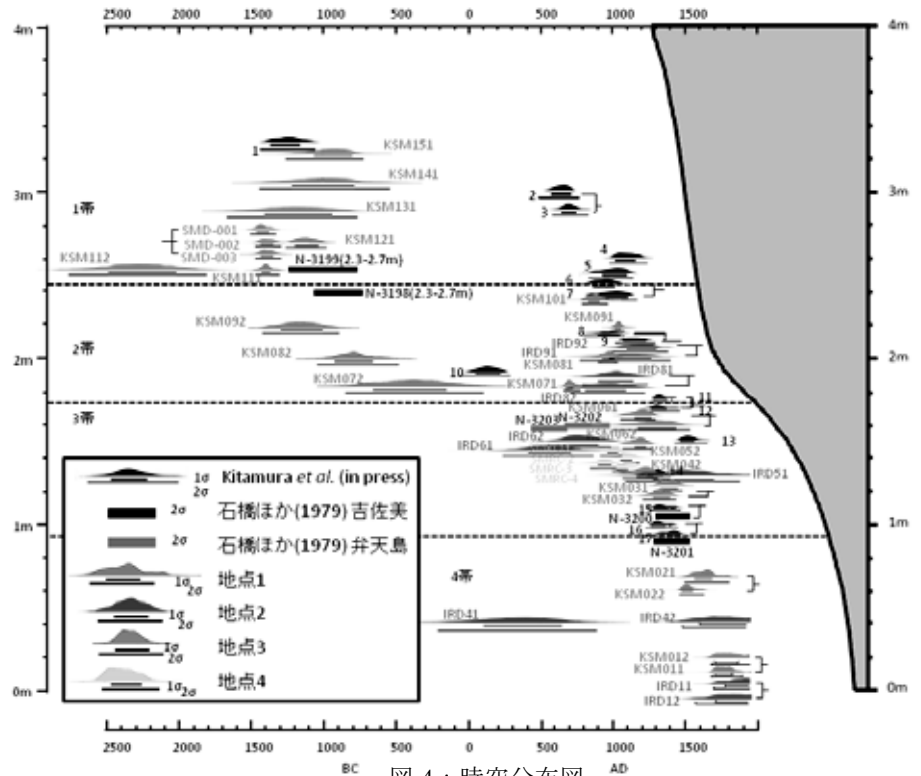


図4: 時空分布図



図5: 津波石

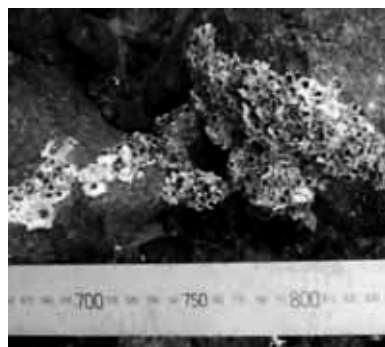


図6: 津波石に見られるフジツボ

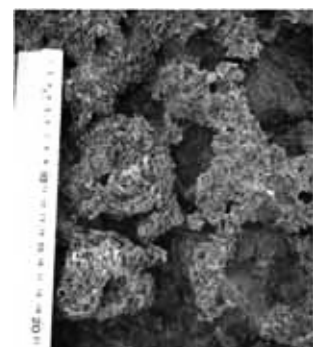


図7: 津波石に見られるヤッコカンザン



図 8 : 地点 5 鍋田の波食台 (2013 年 11 月 16 日 13 : 03 撮影)

The Network of Universities
in SHIZUOKA

共同公開講座「下田市と南伊豆町の大地に残された地震の記録」のご案内

東北地方太平洋沖地震に伴う大震災を教訓に、静岡県では第4次地震被害想定を策定している。その一環として、静岡大学と静岡県は、津波地帯の調査が行われていない下田市と南伊豆町で、津波地帯の調査を行っている。これまでの調査で、津波地帯は見つからないが、「地震に伴う大地の隆起が認められるフシ」などの海洋生物の化石が確認された。この調査の結果を、講演と野外観察を通じて分かりやすく紹介する。

日時・会場
 日時: 2013(平成25年)11月17日(日) 10:00~12:00
 会場: 下田市立朝日小学校
 (下田市吉佐美644番地)

内容
 講師: 静岡大学 理学研究科 教授 北村真寿
 野外観察: 吉佐美の海岸沿いの隆起貝層で地震性隆起について現地説明を行う。

図 9 : 共同公開講座案内



海食洞内で地震による地質の隆起などについて説明する北村教授(右から2人目)＝下田市

地震の原理や痕跡紹介

下田 静岡大北村教授が講義

下田市市民課は17日比較的高いマグニチュード(「大地に残された地震の記録」講演)模範地帯への備えの大切さを訴えた。同市立朝日小などで開いた。講師として招かれた静岡大学院理学研究科の北村真寿教授が、市民らの前で、地震や津波のメカニズムを説明したり、発生頻度が

比較的高いマグニチュード(M)8級の大規模食洞に移動。北村教授が貝の化石や地質などから、地層の隆起年代などについてレクチャーした。

これまでも同市と南伊豆町で現地調査を重ねてきた北村教授は「最後の地震性隆起から50年経過している」とが分かってきた」としたが「下田と南伊豆で大規模津波の痕跡は見つかっていない」と述べた。

図 11 : 静岡新聞 2013 年 11 月 18 日

海食洞で大地震の痕跡見学

波の浸食によりできた海食洞で、内部に残る過去の大地震の痕跡を見学する観察会が17日、下田市吉佐美の海岸で行われた。静岡

北村教授(右から2人目)の説明を聞きながら海食洞を見学する参加者たち(17日、下田市)

岡大学院理学研究科の北村真寿教授(古環境学)のグループが昨年度から調査。地層中の貝殻の分布を手がかりに、地震に伴う地殻の隆起がいつ頃、どの程度の規模で発生したかについて調べている。

観察会は同市などが公開講座として企画し、市民ら約40人が参加。北村教授から、下田市周辺で実施された過去の津波や地震に関する調査研究などについて講義を受けた後、ヘルメットをかぶって巨大な海食洞に入り、足元や頭上にある貝の層を熱心に眺めた。

参加した同市立朝日小学校の高橋美智子校長は「学んだことを教育や防災に生かしたい」と話していた。

図 10 : 読売新聞 2013 年 11 月 18 日

メロンのブランド名が消費者に与える感覚とブランド力強化の課題 —袋井市農産物のブランドエクイティ構築とマーケティング活動に関する研究—

静岡理科大学 総合情報学部 三原研究室

指導教員：准教授 三原康司

参加学生：4年 大川智生

3年 浅田知規、孫橋仰大、石埜智明

研究概要

本研究室では農産物のブランドエクイティ構築に関する調査研究を行っている。本研究はその一環であり、メロンのブランド名（力）が購買者に与える影響を、試食実験によって明らかとし、袋井市クラウンメロンのブランド力強化の課題を考察した。実験の結果、ブランド力の高いメロン（夕張）はブランド名によって好感度がアップし、あまり知られていないブランド（アールスメロンなど）では、ブランド名によってダウンしているということがわかった。これらの分析から、クラウンメロンは、実際の品質は高く評価されているが、それに伴ったブランド力を持っていないことが明らかとなった。特に外観と味に関しては高く評価されているので、今後は、味と外観を全国的に認知させるマーケティング活動が課題である。

1. はじめに

袋井市には、クラウンメロン、袋井茶、袋井米という3つのブランド農産物がある。三原研究室では、これらの農産物のマーケティング・システムに関する研究を進めている。その中で本年度は、メロンのブランドエクイティ構築に関する調査研究を行ってきた。その調査結果の一つとして、全てのメロンの味は毎年一定ではなく、年によって味や外観が多少変化しているにもかかわらず、購買者は味の変化には気づかず（あるいは気にせず）購入しているということがわかった。すなわち、一度食べて「おいしい」と思った、あるいは世の中で「おいしい」と言われているブランド力があるメロンに対する好感度は、本当の味や外観に対する好感度よりも高く評価されていると考えられる。（ブランド力がない場合は、好感度には差がないと思われる。）そこで本研究では、ブランド名（力）が購買者に与える影響を、試食実験によって明らかとし、袋井市クラウンメロンのブランド力強化の課題を考察することを目的とする。

2. 研究方法

メロンのブランド名が、メロンを購入しようとしている人・食べる人の感覚に与える影響を調べ、販売を促進するためのマーケティング戦略（ブランド戦略）と施策に関して考察する。

これまでのメロンのブランドエクイティ構築のための調査研究の中で、下記のような結果とそれに基づく仮説を考えた。

[これまでの調査結果]

全てのブランドメロンの味は毎年一定ではない。しかし、リピーターの多くはブランド名（あるいは産地）を指定して購入する。

[仮説]

- ・ブランド名（力）は、消費者が感じる品質（外観、味など）に影響を与えている。
- ・ブランド名（力）に影響を与えている品質要因（外観、触感、色、香、味）には順位がある。

本研究では、これらの仮説を検証するために以下に示す手順で試食実験・分析・考察を行った。

- 1) 仮説検証のための実験内容の検討・決定
- 2) 試食実験
- 3) 結果分析・考察
- 4) マーケティング要因の明示

以下に方法の詳細を記す。

- 1) 仮説検証のための実験内容の検討・決定

仮説は以下のふたつである。

「消費者は、ブランド名によって品質（外観、味など）を判断している。」

「ブランド好感度に影響を与えている品質要因（外観、触感、色、香、味）に順位がある」

この仮説を検証するために、被験者がブランド名を知らない場合と知っている場合の、品質に対する好感度に関するデータを収集し、解析することができる実験を考えた。以下に実験内容を決定した検討項目を示す。

- ◆品質に関して、五感（視覚、聴覚、触覚、臭覚、味覚）の5つに対して判断できる内容とする。（本実験において聴覚との関連性は低いと判断し、聴覚データの収集は除外した）
- ◆ブランドを知っている場合と知らない場合の感度実験であるため、被験者はできる限り同年代とする。
- ◆被験者のブランド感度に影響を与えている可能性がある、メロンに対する経験・知識・感覚のデータの収集を行っておく。（結果から関連性がありそうであれば別途詳細分析を行う）

以上の検討の結果、次項で示す実験を行った。

- 2) 試食実験

- ・日時 : 2013年12月18日 16:45～18:30
- ・場所 : 静岡理科大学 研究棟5階 514実験室
- ・被験者 : 20～21歳の大学生 男6人、女6人 合計12人
- ・実験内容 : 被験者情報
性別、好きな果物、メロンを食べる頻度、果物を買う時重視すること、
など。
: 実験対象メロン
・クラウンメロン、 ・北海道赤肉（夕張）メロン、
・クインシーメロン、 ・アールスメロン

: 実験内容

- 実験1：4種類のメロンに対して、ブランド名を知らせずに、
外観、触感、カット後の外観、香り、味の5項目に対して、
8段階の評価をしてもらう。好感度が高い場合は高得点とする。
- 実験2：実験1と同様の内容を、事前にブランド名を知らせて行う。

3. 結果分析

3-1) 結果のまとめ

表3-1 メロン別・被験者別の評価結果

被験者番号	性別	アールスメロン										クインシーメロン									
		実験1					実験2					実験1					実験2				
		外観	触感	カット外	香り	味	外観	触感	カット外	香り	味	外観	触感	カット外	香り	味	外観	触感	カット外	香り	味
1	女	8	5	5	4	4	4	4	6	6	5	6	6	7	5	6	6	4	7	6	4
2	女	4	3	7	7	4	5	5	7	7	6	6	7	6	7	8	5	5	6	5	6
3	女	5	3	6	4	5	4	6	5	4	4	5	5	6	7	7	5	5	6	6	5
4	女	3	3	5	2	2	2	1	5	1	2	5	5	7	4	4	5	4	6	4	4
5	女	4	4	5	4	2	4	5	6	5	3	6	5	7	5	5	6	5	7	6	7
6	女	7	7	4	4	5	5	5	6	3	5	3	3	4	5	3	3	3	3	4	3
7	男	7	7	7	6	4	6	5	5	6	2	4	6	8	6	8	4	4	7	6	5
8	男	4	6	6	6	6	6	6	7	7	6	6	6	7	6	7	6	6	7	8	7
9	男	8	5	8	5	6	6	3	4	5	4	4	4	8	7	8	5	3	8	6	6
10	男	8	6	6	7	6	8	6	7	6	5	5	6	8	7	8	6	7	8	6	6
11	男	6	4	6	6	5	6	4	4	4	6	4	4	6	5	6	3	3	4	6	6
12	男	4	4	7	7	7	4	4	5	4	4	7	7	5	6	6	3	3	5	4	4

クラウンメロン										夕張メロン									
実験1					実験2					実験1					実験2				
外観	触感	カット外	香り	味	外観	触感	カット外	香り	味	外観	触感	カット外	香り	味	外観	触感	カット外	香り	味
7	6	6	5	7	6	6	7	6	8	7	6	7	5	8	5	6	7	5	7
5	7	6	5	7	6	5	6	7	8	3	4	6	5	8	5	6	8	8	7
7	6	4	5	8	7	8	6	7	8	2	4	5	5	8	5	4	5	6	8
6	6	6	4	8	7	5	7	6	8	7	5	6	4	8	7	6	6	5	7
6	5	7	7	8	7	5	7	6	8	5	5	8	7	8	7	6	7	6	6
4	5	3	4	6	4	5	4	6	3	6	4	4	5	2	6	6	5	6	3
6	6	7	7	8	6	5	7	6	7	3	5	3	6	8	7	7	8	5	8
6	6	8	8	8	6	7	8	8	8	5	6	7	7	8	6	7	7	7	8
6	4	2	5	8	8	4	8	8	8	2	3	6	6	5	8	5	8	7	8
6	6	7	8	7	7	7	6	6	7	6	5	8	8	6	6	7	8	7	7
6	5	7	6	8	5	6	6	5	8	3	5	5	7	7	5	7	6	8	7
6	5	4	5	6	4	4	6	6	7	4	3	4	6	7	5	5	6	6	7

3-2) 分析

ブランド 知らず と 知っている の得点データを、各メロン別、実験項目別に比較した。

1) 合計点による比較分析

図3-1~4は各メロン別の項目別評価合計点の比較グラフである。

このグラフから、アールス、クインシーはブランドを知らせた方が、得点減少傾向があり、夕張は知らせた方が増加傾向、クラウンはほとんど変わらないという結果がわかる。

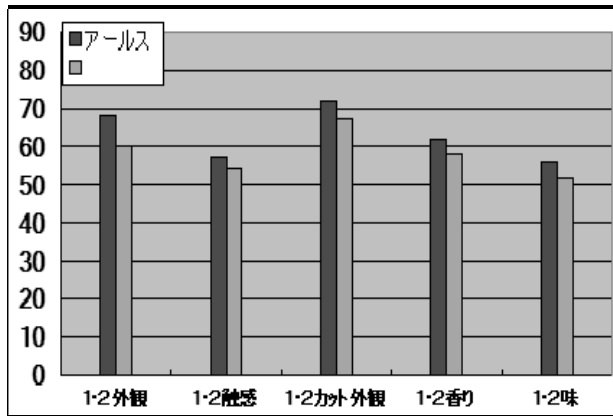


図3-1 アールスの合計点比較

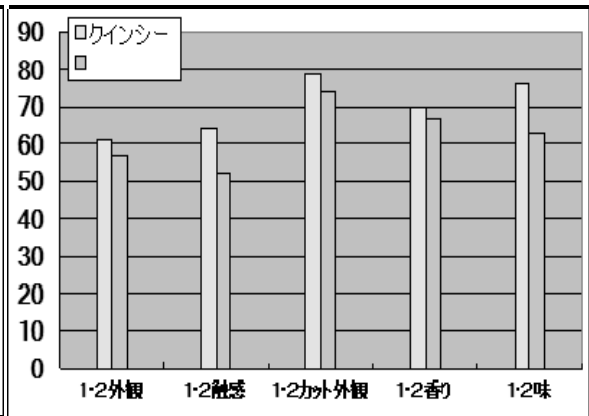


図3-2 クインシーの合計点比較

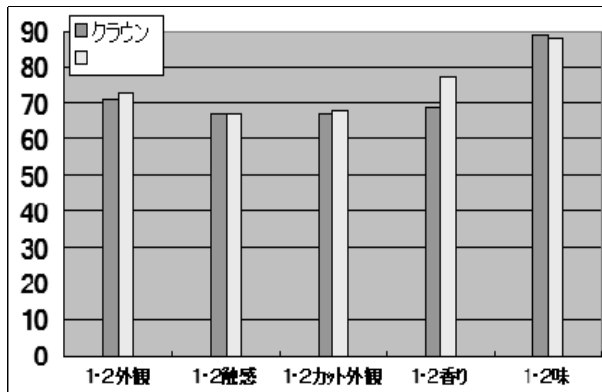


図3-3 ク라운の合計点比較

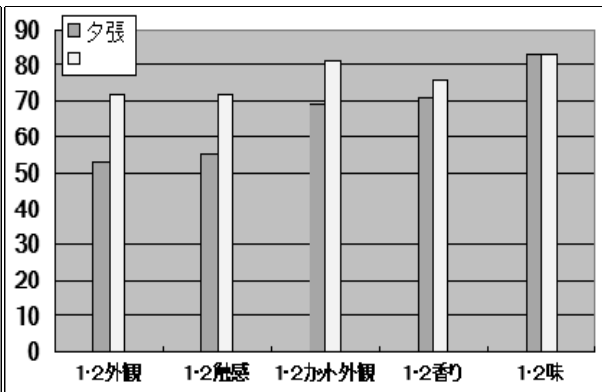


図3-4 夕張（北海道赤肉）の合計点比較

2) 平均点による詳細分析

各メロン別の項目別評価を平均点の比較によって詳細分析を行った。平均点の比較表が、表3-2である。この結果から、表3-3にメロンのブランド力の要因となっている品質順位を示した。

表3-2 4つのメロンの平均点比較（外観、触感、カット外観、香、味）

平均点の差を比較(ブランド知る知らないでどの項目の差が大きいか)									
	夕張	クラウン	クインシー	アールス	点差				
11外	4.42	5.92	5.08	5.67	外観	1.58	0.16	-0.33	-0.67
21外	6	6.08	4.75	5					
11触	4.58	5.58	5.33	4.75	触感	1.42	0	-1	-0.25
21触	6	5.58	4.33	4.5					
11カット外	5.75	5.58	6.58	6	カット外観	1	0.92	-0.41	-0.42
21カット外	6.75	6.5	6.17	5.58					
11香り	5.92	5.75	5.83	5.17	香り	0.41	0.67	-0.25	-0.34
21香り	6.33	6.42	5.58	4.83					
11味	6.92	7.42	6.33	4.67	味	0	-0.09	-1.08	-0.34
21味	6.92	7.33	5.25	4.33					

表3-3 メロンのブランド力の要因となっている品質順位

	夕張	クラウン	クインシー	アールス
1位	外観	カット外観	香り	触感
2位	触感	香り	外観	香り
3位	カット外観	外観	カット外観	味

3) t 検定による有意差の確認

t 検定を行い、表 3-3 の要因をブランド力と結びつけて良いかを確認した。

表 3-4 の各項目の右側の○は、t 検定の結果 5% で有意差があったものを示している。

表 3-4 メロンのブランド力の要因となっている品質順位の t 検定結果

	夕張		クラウン		クインシー		アールス	
1 位	外観	○	カット外観	—	香り	—	触感	—
2 位	触感	○	香り	—	外観	○	香り	—
3 位	カット外観	○	外観	—	カット外観	—	味	—

この結果から、ブランド力に大きな影響を与えている要因は、外観、触感、カット外観であることが明確化された。

4. 考察

ブランド力の高いメロン（夕張）はブランド名によって好感度がアップし、あまり知られていないブランド（アールスなど）では、ブランド名によってダウンしているということがわかった。

クラウンメロンは、実際の品質は高く評価されているがブランドによるポイントが上がっているわけではないため、あまりブランド力を持っていないということが明らかとなった。

ブランドを知らない状態では「アールス」「クインシー」が、主に外観で「夕張」「クラウン」に勝っていた。そしてブランド名を知ると、「夕張」「クラウン」が勝る傾向があった。つまり知らないブランドの場合は、外観では好印象でも、自分の知らないブランドだと評価が下がってしまうことを示している。このように、知らないブランドだとマイナス効果になる場合があるので、宣伝時には工夫が必要と言える。例えば、別の有名ブランドと比較するようなプロモーションをする、などが考えられる。

赤肉は、青肉より見た目がおいしそうに見える傾向があるので、同一品種で赤肉を作れば、拡売に貢献するであろう。

カット後の外観では、硬めではっきりした形の方が評価は高いので、広告の写真や陳列には、熟しすぎていない硬めのものを使うのが良いと考えられた。

外観はメロンの好感度に大きな影響を与えており、外観を重視したマーケティング（特に広告宣伝・展示など）が必要である。

既に有名になっているブランドの場合は、ブランド名を積極的に使うのが効果的である。

5. 結論

ークラウンメロンのブランド力強化の課題ー

クラウンメロンは、実際の品質は高く評価されているが、それに伴ったブランド力を持っていないことが明らかとなった。特に外観と味に関しては高く評価されているので、今後は、味と外観を全国的に認知させるようなマーケティング活動を推進することが課題である。

以上

伊豆月ヶ瀬梅組合と連携した新たな梅製品の開発

日本大学短期大学部（三島校舎） 食物栄養学科 室伏ゼミ

指導教員：教授 室伏 誠

参加学生：田島 理瑛・佐藤沢子・小林美晴

【要約】

伊豆市月ヶ瀬梅組合は、伊豆市月ヶ瀬地区に県下でも有数の1500本におよぶ梅林を有し、梅の実から作られる特産の梅干しは同組合の中心をなす商品である。5年前に同組合からの依頼があり、梅林の整備や年に2回行われる「梅まつり」や「梅狩り」などの行事にも毎年参加している。一方、昨年から連携を進めている鰯節等の生産・販売を古くから行っている沼津市志下のミカコーポレーション(山平水産)の駿河湾産うるめいわしを使った特産の鰯節の活用について依頼があり、新商品の開発について検討を行ってきた。両団体の商品を活用して本学の学生組織「プロジェクト M」が協働して新商品であるドレッシングの開発を行った。

今回開発した梅干しと鰯節を融合させることで完成したドレッシングの特徴は、サラダや葉野菜を使ったおひたしなどはもちろん、豆腐や揚げ物、煮魚、焼き魚などの和テイストの様々な料理とよくマッチする。さらに、ステーキやカツ、フライドチキン、さらにはフランス料理や中華料理などの料理にも美味しさを引き立てることができる。若い人たちはもちろん、子供からお年寄りまで幅広い嗜好性を意識したものである。もちろん、素材は地域の天然素材を添加物を加えずに作り上げることで、安全安心をモットーにしている。ドレッシングの名前は、駿河湾の恵みうるめいわしと、伊豆の山、天城月ヶ瀬の山腹に実った恵みの梅の実を古くから伝わる技術で加工された梅干しと駿河湾産ウルメイワシを伝統の技法で作られている鰯節を活用することをイメージし、駿河の海と伊豆の山の「恵みドレッシング」(Blessings from the mountains of Izu and Suruga Bay Dressing)とした。それぞれの地域の特産品としての価値に加え、地域の連携を図ることで、両地域の活性化の一助となれば幸いである。

【研究の目的】

室伏ゼミでは、「食と健康・生活環境の向上」を目的として、地域の活性化、地域振興を推進するための活動に取り組んでいる。様々な特産品の開発や活用、安心安全を目指した農作物の栽培、さらに地域支援など取り組みは多岐にわたるが、その活動の中心をなすのが「食と健康、生活環境の向上」を基本理念とした学生組織「プロジェクト M」である。本プロジェクトの構成メンバーは、栄養士資格を持ちより高い知識と技術を学んでいる専攻科食物栄養専攻の学生と、栄養士課程において栄養士を目指して食と栄養の専門知識や技術を勉強する食物栄養学科の学生である。

本研究で取り組んできた「伊豆月ヶ瀬梅組合と連携した新たな梅製品の開発」では、こ

れまで行ってきた月ヶ瀬梅組合の梅製品の開発と、静岡県東部沼津市で古くから節の製造会社として歴史のある山平水産の新社ミカコーポレーションとプロジェクトMとの連携を期に、静岡県東部の2地域の特産品を活用することで、新たな展開として、2つに地域の特産品を生かした地域連携がスタートした。5年前から連携が始まった伊豆市月ヶ瀬梅組合とは、既に、一社一村しずおか運動として静岡県より認定され、表彰も頂いている。伊豆月ヶ瀬梅組合との連携は、月ヶ瀬地区の地域活性化として継続している。組合の梅林は、県下でも有数な6.2haの規模があり、山裾に広がる梅は、南高梅や豊後梅を中心に6種類、1,500本におよぶ梅の木を育てている。我々プロジェクトMは、平成22年から、梅林の整備や梅の収穫、梅干しづくりや毎年行われる「梅まつり」や「梅狩り」などのお手伝いも行ってきた。新たなミカコーポレーションとの連携は、我々プロジェクトMの活動や研究活動として新しい展開となっている。研究として行ってきた、月ヶ瀬梅組合の梅林から収穫された梅やその加工品の成分分析。特に平成25年度から始めた6種類の梅の成分比較。一方で、ミカコーポレーションの特産品であるウルメイワシの鰯節の成分特性に関する研究などの研究は、新たな梅干しと鰯節を使った商品開発に大いに役立っている。



写真1 梅林での梅の収穫作業



写真2 収穫を行った梅の実



写真3 月ヶ瀬梅組合の梅干し

本研究は、伊豆月ヶ瀬梅林で収穫され代表的な商品となっている梅干しと、駿河湾産ウルメイワシを使った特産の鰯節のコラボレーションが実現し、複数の地域をプロジェクトMの活動を通して結ぶことで新たな取り組みが成立した。

以上の経緯の中で、これまで温めてきたアイデアをドレッシングに集約することになった。新商品の開発に当たっては、新しい商品に含まれる梅特有の成分と鰯節の成分の融合が重要な点である。この点については、今後商品の付加価値の検証として栄養特性についてさらに分析を進める予定である。

【研究の内容】

今回の商品開発は、農事組合法人伊豆月ヶ瀬梅組合の梅林で収穫した梅を使用した「梅干し」と、株式会社ミカコーポレーションが販売しているウルメイワシの「鰯節」をそれぞれの特徴を生かしてドレッシングとして商品化することにある。それぞれの特徴を活かすだけでなく、ドレッシングとして使用できる対象（食品）をできるだけ広くすることも目標とした。すなわち、いわゆるサラダだけでなく、豆腐や揚げ物、さらには葉野菜を使ったおひたしなど、さらに肉類との相性も考慮した。対象も、若い人たちはもちろん、子供からお年寄りまで幅広い嗜好性を意識した。また、梅干しもいわし節も日本食として古くからある食材である。これらを主材料とする中で、ドレッシングの活用対象を幅広くな

るよう考慮した。さらに、自然の食材を活用するように心がけ、添加物等を含んでいない安全安心な食品であることを心がけた。様々な試行錯誤の中で、プロジェクトMのメンバー（学生）を中心に本学の学生の協力も得て試食をもとに調合等の改善を図った。この際、梅干しと鰯節それぞれの個性を尊重しつつ、お互いに共存できるような配合を詳細に検討した。さらに、梅干の果肉や鰯節の食感も重要な要素とした。

【研究の成果】

本研究では開発したドレッシングは、幅広い年齢層に、食卓はもちろん、レストランなどの様々な飲食店などにおいても利用いただけるように工夫した。また、前述のとおり伊豆市月ヶ瀬の特産品である梅干しと沼津市の特産品である鰯節が、融合することにより相乗効果を出せるような配合となるよう工夫した。本研究で、作り上げたドレッシングの原材料は、梅干し（月ヶ瀬梅組合製造）・ウルメイワシ鰯節粉末（ミカコーポレーション）・蜂蜜・塩・レモン汁・コショウ・だしつゆ・ワインビネガー・オリーブオイルである。

本ドレッシングの名称は、主材料の地域性がわかりやすいネーミングとした。すなわち、駿河の海の恵みスルメイワシから作られた鰯節と、伊豆の山、天城連山の山腹で実った恵の梅の実から作られた梅干しを意識して、「駿河の海・伊豆の山・恵みドレッシング」“Blessings from the mountains of Izu and Suruga Bay Dressing”とした。地域の特産品としての価値に加え、それらが一体となることで新たな味や使い道が生まれれば幸いである。これらの地域連携により、地域の活性化の一助となることを期待している。

●梅特有の成分分析

本研究に用いた梅干は、H25年に収穫された梅を用いている。これらの梅は、月ヶ瀬梅林で栽培されている6種類の梅の品種が含まれている。H24、H25年に収穫した梅干しの成分調査（品種ミックス）について、リンゴ酸、酢酸、クエン酸や青酸配糖体であるアミグダリン、アミグダリンの分解産物であるベンズアルデヒド、ベンズアルデヒドから生成する安息香酸、ベンジルアルコールについて行った。その結果は、リンゴ酸、酢酸、クエン酸が比較的高値であった。これらは、梅干しの味に深く関係している。また、アミグダリンは青梅に多く含まれるが、アミグダリンと安息香酸関連物質の合計含有量に対するアミグダリン量として調べることができる。分析の結果、梅干しは約31%で、加工の過程でアミグダリンが分解されたことをわかる。なお、生梅のアミグダリン量は約92%であった。このことから、加工の過程でのアミグダリンがおよそ1/3程度に分解されたことをわかる。組合では大量に梅干しを漬け込み独自の製法で製造しており、その加工過程でアミグダリンの数値が低くなっていたものと思われる。なお、月ヶ瀬梅林の6種類の梅について、H25年度に収穫した梅を分析を進めている。すべての結果はまだ出ていないが、同じ山腹で栽培されている梅木であるが、梅の品種ごとに含有分量には顕著な違いが出ている。具体的には、有機酸が多く含まれる品種や逆に少ない品種もある。また、各梅ごとに梅シロップを作製した結果では、それぞれに香りや味にも差が認められた。本ドレッシングについても、将来は、品種を決めて梅の香りや味の違いがある商品の開発も可能となるかも

しれない。これらについては、H26年に収穫する梅の実を使って研究を進めていきたい。

【地域への提言】

本研究では、伊豆市月ヶ瀬梅組が製造している梅干しと、沼津市ミカコーポレーションが製造している鰯節をコラボレーションすることで、2市による新たな静岡県東部の地域の特産品となるよう商品開発を行った。伊豆半島を中心とした各地域には、様々な素晴らしい商品や素材がある。これらを各市町で協働することにより、より素晴らしい商品が開発され、新たな地域の魅力を発信出来れば幸いである。さらに、私どもプロジェクトMでは、静岡県東部を中心に、既にいくつもの地域と連携した商品開発を進めている。今回、初めて2つの市の団体・企業の協働を進めることとなったが、今後も、可能な限り新たな取り組みをお手伝いをさせていただければ幸いである。

【地域からの評価】

私どもプロジェクトMが、日頃の地域連携の中で行ってきた伊豆市月ヶ瀬梅組と沼津市ミカコーポレーションとの連携が、2市をまたがることで高い評価を頂いている。現在、これら活動を広く紹介する機会はまだないが、静岡県の東部から西部までを広く展開している静岡県の「協働の底力組」の活動の中で、第10回協働事例発表会（協働の底力。地域づくり発表会 in 伊東）が平成26年1月26日（日）に伊東市観光会館別館で開催された。現在、協働の底力組東部部会委員を努めており、私どもプロジェクトMも、今年度の活動についてポスターセッションで報告させていただいた。今回の伊豆市月ヶ瀬梅組と沼津市ミカコーポレーションの特産品をプロジェクトMのコーディネートとアイデアにより完成させた駿河の海・伊豆の山の「恵みドレッシング」の完成について、ポスター発表後出席者からもお褒めの言葉をいただくことができた。さらなる取り組みとして、静岡県の東部、中部、西部のそれぞれが持つ素晴らしい素材を、新たな展開として学生が連携・協働して商品開発を行うことで、地域の活性化に繋がることが出来れば幸いである。



農事組合法人伊豆月ヶ瀬梅組



株式会社 ミカコーポレーション

mizunoto

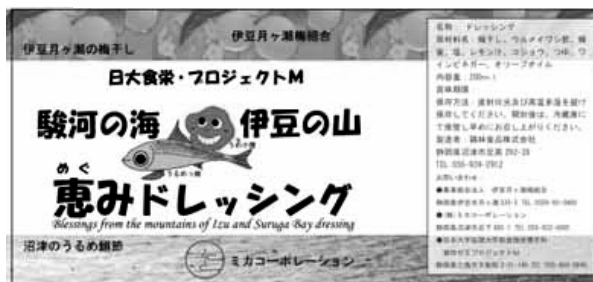


完成した駿河の海・伊豆の山「恵みのドレッシング」



日大食栄養室伏ゼミプロジェクトM

ボトルラベル



学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 土倉ゼミナール

指導教員：専任講師 土倉英志

ゼミ学生：中川侑大（ゼミ長）、倉田佳鈴美、小林智恵、齋藤詩歩、田端ちづる、富田一磨
平野梨沙、山田修平（以上、地域共創学科2年）

要約

近年、アクティブ・ラーニングやワークショップ型の学びに注目が集まっている。筆者らはサイエンスカフェの実施と調査を中心とする実践研究に取りくんだ。この実践研究には2つの目的があり、ともに達成することができた。1つ目は、大学生が主体となって、サイエンスカフェの企画・運営を行うことであった。2つ目は、サイエンスカフェの参加者が、そして企画・運営を行う大学生がどのようなことを学ぶのかを検討するための手がかりを得ることであった。参加者は、科学（心理学）に関心を持ったり知識を得ただけでなく、イベントに参加した多様な人びととの対話を通じて、自分とは異なる考えや価値観があることに気づいたことがわかった。企画・運営者を行った大学生は、イベントを企画・運営することのむずかしさ、プレゼンテーションの技術、ファシリテーションの重要性など多くのことを学んだことがわかった。さいごに、市民の交流の場としてのサイエンスカフェの重要性について論じた。

1. はじめに

筆者らは、浜松学院大学の土倉ゼミナールに所属している（授業名は「主題演習」で2年次のゼミナール科目である）。近年、グループ・ワークなどを中心としたアクティブ・ラーニング（課題解決型の能動的学修）、ワークショップ型の学びに注目が集まっている（cf. 荻宿・高木・佐伯，2012；山内・森・安斉，2013）。本学もまたアクティブ・ラーニングに力を入れているが、とくに2年次のゼミナールは、大学のなかで学ぶことにとどまらず、地域において活動を行うことで、学びを深めていく点に特徴がある。土倉ゼミナールでは「科学をテーマとしたサイエンスカフェの実施を通じて学びについて考える」ことを目的に活動に取りくんできた。その活動の中心にあるのが、サイエンスカフェの実施と調査を主とする心理学的な実践研究であった。

2. 問題関心

2.1 科学技術コミュニケーションとサイエンスカフェ

そもそもサイエンスカフェとは何であろうか。そして、サイエンスカフェの実施にはどのような意義があるのだろうか。従来の科学技術コミュニケーションの問題点を踏まえて説明を行っている平川（2009；2011）の議論を参照したい。

従来の科学技術コミュニケーションは、専門家が一方的に市民に理解を促す「一般市民の科学理解（Public Understanding of Science：PUS）」であった。たとえば、専門家による講演会、専門書を通じた情報の伝達はその例となる。この場合、専門家と市民の関係は、前者が後者に正しい知識を教え込むという一方的なものになりやすい。また、専門家は、科学技術の「おもしろさ」や「メリット」といった光の面を話しやすく、結果的に市民が疑問に思うこと、不安に感じることにに対する回答が得られないという問題点があった。

こうした点を解決するために、専門家と市民の「対話」「協働」「参加」など、コミュニケーションの双方向性を重視する「科学技術への市民関与（Public Engagement in Science and Technology：PEST）」の意義が指摘された。そのねらいは、市民と専門家、政策決定者などのあいだで、対話を通じて理解を共有したり、理解を深めることにある。PUSとは異なり、専門家は科学技術の光の面だけでなく、陰の面をも語る事が求められる。そのため、市民にとっては自らの利害に関わる科学技術の面を理解する機会となる一方、専門家にとっても市民のニーズを知る機会となる。

こうした PEST の取り組みのなかでも、数多く実践されており、市民が気軽に参加できるとされているのが

サイエンスカフェである。岡橋・三上（2008）によるサイエンスカフェの説明をみてみたい。サイエンスカフェとは、「街角のカフェやバーで科学・技術について気軽に話し合うイベントのことである。講義や講演会とは違い、参加者はリラックスした中で、科学・技術の面白さや疑問、喜びや不安を素直に語り合うことができる」。気軽さやリラックスすることが重視されていることがわかる。

2.2 目的1：大学生によるサイエンスカフェの企画・運営

ところが、サイエンスカフェで話題提供を行っているのは大学教員や研究者が多く、開催場所も大学であることが少なくない。くわえて、大学の社会貢献活動の一貫として実施され、参加費用を無料あるいは低く設定することから、提供される飲食物がお菓子であったり、ペットボトルやインスタントの飲み物であることも多い。このように、市民にとっては必ずしもリラックスしたり、語りやすい場になっているとはいいたい面がある。

そこで筆者らは、（1）大学生が、（2）大学ではない場所で、（3）科学にあまり興味がない人も参加してみたいくなる、サイエンスカフェを実施することを目指した。（1）に関しては、大学で科学（心理学）を学んでいる途中、いわば専門家見習いである筆者らがサイエンスカフェを行うことで、参加者が気兼ねなく対話できるだろうと考えた（専門家ではないことによるデメリットもあるが、本論では省略する）。（3）に関しては、サイエンスカフェとして、ケーキと飲み物を提供することにした。

こうした活動は大学の地域貢献としても意義があるだろう。以上が、大学生がサイエンスカフェを企画・運営するという実践研究を行う目的の1つ目である。

2.3 目的2：サイエンスカフェでの学びの検討

サイエンスカフェはさまざまな場所で行われている（cf. 滝澤・室伏，2009；2010；2011）。それではサイエンスカフェの参加者にとって、このイベントはどのような意義をもつのだろうか。もちろん、サイエンスカフェのテーマに関する知識を得ることは予測できる。しかし、それだけだろうか。また、学びを促す契機はどのようなことだろうか。こうした点は十分に明らかにされていない。

上述のとおり、ワークショップ型の学びにも注目が集まっている（cf. 土倉・亀井・文野，2009；土倉・勝谷・文野・亀井・青木，2013）。しかし、その学びのとらえがたさもあり、知見が十分に蓄積されているとは言えない（文野，2011）。そのため、イベントを企画・運営することで、企画・運営者がどのようなことを学ぶのかを理解することもまた重要であると言えよう。

以上のように、サイエンスカフェにかかわる人びと（参加者／企画・運営者）の学びを検討するための手がかりを得ることを実践研究の目的の2つ目とした。

3. サイエンスカフェ実施までの準備とサイエンスカフェの概要

イベントの実施までには、科学技術コミュニケーションの現場の見学、話題提供の準備、参加者とともに行うワークやディスカッションの準備、ファシリテーションの練習、ほかにも開催場所の検討・交渉・依頼、飲食物の提供の交渉・依頼、参加者を募集するためのチラシやポスターの作成とポスティングなどの広報、当日の受付の準備等々、実に多くの活動を行った。こうしたことの説明する紙幅がないため、サイエンスカフェの概要のみを表1にまとめた（詳細は2014年に発行予定の報告書を参照されたい）。サイエンスカフェは、浜松市の西部協働センター（旧公民館）で2回、浜松市内の2カ所のカフェで4回、計6回実施した。西部協働センターでは参加者を中学生と高校生に限定した。カフェでは一般の方を対象とした。

表 1. サイエンスカフェの開催概要

日程	時間		開催場所	テーマ	責任者	募集対象	参加者
11/2(土)	13:00-16:00	180分	西部協働センター	恋愛を見つめなおす コミュニケーションにおける表情の役割	齋藤・中川 山田・富田	中高生	7名
11/10(日)	13:00-16:00	180分	西部協働センター	メタ認知と記憶方略 集団心理とその影響	小林・平野 倉田・田端	中高生	11名
12/18(水)	14:35-15:45	70分	Cats-café(浜松南店)	ストレスと心理学	小林・山田	一般	15名
12/18(水)	16:20-17:30	70分	Cats-café(浜松南店)	音楽と心理学	倉田・小林	一般	8名
12/21(土)	14:35-15:45	70分	エスポワール	超常現象の心理学	齋藤・平野	一般	9名
12/21(土)	16:20-17:30	70分	エスポワール	結婚と心理学	中川・富田	一般	13名

サイエンスカフェの当日、参加者は3～5名ずつのグループで席に着いた。ゼミ生は各回2名が話題提供者・責任者となり、パワーポイントを用いて参加者に話題提供を行った。話題提供を行うときは、一方的に話すのではなく、参加者に多くの問いかけを行うようにした。また、適宜グループワークやディスカッションを設けた。話題提供者以外のゼミ生は、話題提供者と参加者の仲介役であるファシリテーターとなり、ディスカッションを盛り上げるために各テーブルのサポートについたり、イベントがスムーズに展開する手伝いをした。

西部協働センターでのサイエンスカフェではTULLY'S COFFEEのドリンクと菓子巧房ほほえみのケーキを、カフェでのサイエンスカフェでは、お店のケーキとドリンクを提供した。これにより、飲食をしながらリラックスした雰囲気イベントを楽しめるよう配慮した。サイエンスカフェ当日の詳細や写真は研究室のブログを参照されたい (<http://tsuchilab.hatenablog.com>)。このように、実践研究の目的のひとつであったサイエンスカフェを無事に実施することができた。

4. サイエンスカフェの参加者と企画・運営者の学び

サイエンスカフェへの参加を通して、参加者はどのようなことを感じたり考えたりしたのだろうか。また、企画・運営者（大学生）はイベントの準備や実施を通して、どのようなことを学んだのだろうか。これらを明らかにするために、ビデオカメラをもちいてイベントの様子を記録した。また、イベント終了時には参加者に自由記述を含むアンケートに回答してもらった。企画・運営者も毎回、アンケートに回答した。そのほか、企画・運営者はイベント終了後にグループインタビューを行い、つぎのイベントに活かすように努めた。データの詳細な分析は別稿に譲り、本論ではアンケートの自由記述の結果から、代表的なものをピックアップして報告する。

4.1 参加者の学び

サイエンスカフェに参加した参加者による記述はつぎのとおりである。

- (1) 「普通の授業や講義より自由でリラックスできるのがいいと思った」(11.10-S.C.2)
- (2) 「喫茶店という独特な環境がまた新鮮でよかった」(12.21-H.M.2)
- (3) 「年代の違う方と普段話す機会はあまりないのでよかったです」(12.21-A.S.2)
- (4) 「グループワークで話し合ってみるといろんな意見が出て楽しかった」(12.21-H.S.3)
- (5) 「これから受験をするので今回聞いたことを使用して面接官に良い印象をもたれるようにしたいと思いました」(11.2-O.N.2)
- (6) 「心理学について深く学んでみたいと思うようになりました」(11.10-S.Y.2)

《凡例》

- ・ 記述後の“11.10-S.C.2”という表記は、11月10日に参加したS(苗字)Y(名前)さんの設問2の回答であることを示している。
- ・ 下線は筆者らによる強調、[]は筆者らによる補足を示している。

まず、参加者がリラックスして楽しみながらサイエンスカフェに参加できたことが確認できた(回答1・2)。学びに関連することとしては、グループワークとディスカッションを通して、様々な考えにふれることができたこと(回答3・4)、心理学の知識を得たり、興味を持ってもらえたことがわかる(回答5・6)。

4.2 企画・運営者の学び

4.2.1 西部協働センターでのサイエンスカフェ

つづいて、11月に実施した西部協働センターでの2回のサイエンスカフェ後の企画・運営者のアンケートをみていきたい。

- (7) 企画・運営が数人のゼミ生に過剰に負担がかかっているのは良い状態とはいえない(11.2.-Y.S.5)
- (8) 台本通りに進めることばかり意識してしまい、少しでも違うこと〔を〕言うと次が出てこない…中略…といった状態になってしまった(11.10.-K.T.5)
- (9) 「どういうときに何をしたら場の雰囲気よくなるかなどが勉強になった」(11.2.-K.T.2)

ゼミ生同士がコミュニケーションを図り、役割分担をすることの大切さとむずかしさ(回答7)、プレゼンテーションをうまく行うことのむずかしさ(回答8)、イベント全体の雰囲気を盛り上げるためのファシリテートの重要性(回答9)などについて学んだことがわかった。

4.2.2 カフェでのサイエンスカフェ

さらに、12月に実施したカフェでの4回のイベント後の企画・運営者のアンケートをみていきたい。

- (10) 「公民館講座〔西部協働センターでのサイエンスカフェのこと〕では、台本を作っていたが今回台本を作らなかったことで型にはまらずプレゼンをすることができた」(12.18-K.T.4)
- (11) 「講座の前に話題提供者と連絡を取り合うことでファシリテートしやすかったし、盛り上がることもできたと思う」(12.21-K.K.4)
- (12) 「うまくできないことや、大変なことが多かったですが、サイエンスカフェをやり切ったことが自信になると思います」(12.21-H.R.2)

前回の反省(回答8)を踏まえて、あえて台本をもちいずに話題提供(プレゼン)に臨む工夫(回答10)、話題提供者とファシリテーターが連携することの重要性(回答11)、イベントをやり切ることで自信を得たこと(回答12)など、11月に実施した西部協働センターでのサイエンスカフェの反省を活かし、さらなる学びが生じていたことがわかった。

以上のように、サイエンスカフェにかかわる人びとの学びを検討するための手がかりを得ることができた。実践研究の目的の2つ目を達成することができた。今後の課題は詳細にデータを分析していくことである。

5. 実践研究をふりかえって

サイエンスカフェを無事に実施することができた今の時点で、一年の活動をふりかえってみたい。一言でいうと「とにかく大変だった」という言葉に尽きる。しかし、大変だった分、学ぶことは多かった。ゼロからイベントを企画・運営する技術を、サイエンスカフェの開催回数を重ねるごとに身につけていくことができた。ただし、「もう一度、サイエンスカフェの企画・運営をやってみたいか？」と問われると回答に困るというのが本音である。

学んだことや考えたことは数え切れないほどあり、少ない紙幅で書き尽くすことはできないが、学んだこととして2点記しておきたい。

5.1 参加者がリラックスし積極的に発言ができる雰囲気づくりの重要性

サイエンスカフェというイベントにとっては、話題提供の内容や話題提供のやり方が重要である。このことにくわえて、今回の活動を通して、ファシリテーターの役割が重要であることを学んだ。イベントの冒頭にはアイスブレイクを、話題提供のあいだには適宜グループワークやディスカッションを行った。こうした活動をどうファシリテートするかによって、参加者が意見を言いやすい雰囲気を作れたり、参加者にとって居心地のよい場を作ることができることがわかった。ファシリテートはイベントを対話型にするかどうかを左右する。

また、ファシリテーターは、各テーブルの雰囲気を作るだけでなく、会場全体に気を配ることも大切であることがわかった。さらに、イベントのタイムスケジュールを把握したうえで、盛り上げるべき時間帯はいつなのか、じっくり聴いてもらう時間帯はいつなのか、といったことを考えてファシリテートすることが求められる。中高生を対象とする場合と一般の方を対象とする場合では、ファシリテーターとして行うべきことが違うことにも気づかされた。こうしたノウハウ（実践知）を蓄積していく必要がある。

5.2 市民の交流の場の創出の重要性

大学教員や専門家が行うために敷居が高くなってしまいがちなサイエンスカフェであるが、大学生という学びの途中の立場の者が話題提供者となることで、気軽に参加してもらえるイベントができたと考える。

西部協働センターのイベントでは中高生、カフェのイベントでは一般の方を参加者として募集した。とくにカフェでは、学生や主婦、社会人など、様々な立場・年代の方に参加していただけた。異なる世代や立場の人びとがおなじテーブルにつき、飲食をともにしながら意見を交換することができた。参加者は、ふだんふれることのない考え方や価値観に気づくことができたようだった。さまざまな人びとが集まり、対話をしていくことで生じる学び、そして、それを可能にする場を創出することは、今後ますます重要な課題となるだろう。

謝辞

本研究の一部は浜松市と浜松学院大学の連携事業として行われました。ご協力いただいた浜松市の職員のみなさまに記して感謝いたします。また、サイエンスカフェの実施にあたっては、開催場所を提供して下さったカフェの関係者のみなさま、参加者募集のお手伝いをして下さった教職員や学生のみなさまをはじめ、多くの方々にご協力いただきました。あらためて御礼申し上げます。

引用文献

- 文野洋 2011 体験から環境を学ぶ, 茂呂雄二・田島充士・城間祥子(編) 社会と文化の心理学, 世界思想社. Pp.175-189.
- 平川秀幸 2009 科学技術コミュニケーション, 奈良由美子・伊勢田哲治(編) 生活知と科学知, 放送大学教育振興会. pp.106-121.
- 平川秀幸 2011 3・11以降の科学技術コミュニケーションの課題—日本版「信頼の危機」とその応答, 飯田泰之・SYNODOS(編) もうダメされないための「科学」講義, 光文社. pp.151-209.
- 荻宿俊文・高木光太郎・佐伯胖(編) 2012 ワークショップと学び1, 東京大学出版会.
- 岡橋毅・三上直之 2007 サイエンス・カフェ, 北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット(CoSTEP)(編) はじめよう! 科学技術コミュニケーション, ナカニシヤ出版. pp.115-128.
- 滝澤公子・室伏きみ子(編) 2009-2011 サイエンスカフェによるこそ1-3, 富山房インターナショナル.
- 土倉英志・亀井美弥子・文野洋 2009 学んだことと学びかたの関連について—保育体験の参加者の学習, 首都大学東京・東京都立大学心理学研究, 19, 13-25.
- 土倉英志・勝谷紀子・文野洋・亀井美弥子・青木弥生 2013 体験の縁取り—乳幼児ふれあい体験における学びから, 浜松学院大学研究論集, 9, 137-147
- 山内祐平・森玲奈・安斎勇樹 2013 ワークショップデザイン論, 慶應義塾大学出版会.

5. 静岡県における韓国語標識の間違い例

3回の調査にわたって、伊豆半島を含めた県東部を中心にして、比較の視点からも西部一部うでも韓国語標識を確認していった。意外と様々なところに韓国語標識や標示が見られた。ただ、間違いが全くないところはないといってもよいほど、間違いが目立つところが多かった。その間違いは次の5つのケースに大別できる。

①ケース1ー表記に一貫性がないもの

本調査で最も多い間違いが多かったケースである。例えば、「河津(かわづ)」は韓国の国立国語院の日本語表記法に従うと「가와즈」が正しい表記であるが、「카와즈」や「카와츠」なども使われていて、バラバラである。一貫性が見られないのは表記に対するガイドラインがなく、勝手に似ている発音を表記として使う傾向があるからだと思われる。ハングル文字を解さない者には違いがわからないからでもある。

②ケース2ー表記が逆になっていたり、入力ミスがあるもの

このケースは文字の表記や意味は合っているが、適切な位置に表示されていない場合である。例えば、実際の「バス乗り場」の位置に「タクシー乗り場」の表示が、「タクシー乗り場」の位置に「バス乗り場」の表示が書かれているようなものである。

また、入力ミスと思われるものもあった。国道1号という表現は「국도1호」なのに、「국도 1호」になっていた。

③ケース3ー日本語の発音をそのままハングル表記するもの

このケースは、日本語の一般名詞をその発音のままハングル表記しているタイプである。

伊豆急下田駅の標示板を例にすると、「町役場」を「まちやくば」と音でハングル表記にしていた。つまり、英語で「machiyakuba」と表示するようなもので、「まちやくば」と読めても、読んだ外国人にはそれが「Town hall」であるのか、何を意味するは分からない。

④ケース4ー韓国語の漢字音のままハングル表記するもの

これは、主に地名を韓国語の漢字音のままハングル表記するタイプである

河津町内にある観光案内所前の標示版には、「下田公園」を「シモダ公園」ではなく、「下田」の韓国語漢字音のまま「하جون公園」と書いてある部分があった。もし、日本人に「하جون パーク」がどこかを英語などで聞いてもお互いに戸惑うだけになるだろう。指導教員によれば、同じようなケースは、世界文化遺産に指定された三保松原の標示版にも見られるという。「清水」を「시미즈」ではなく、「清水」の韓国語漢字音のまま「チョンス」と書かれている。

⑤ケース5ー直訳からくる間違い

このケースは日本語を無理やりに韓国語に直訳したことによって起こる間違いである。伊豆稲取では「雛のつるし飾りまつり」が韓国語表記では「女人形ぶら下げ、装飾祭り」となり、ただ単語を並べたような訳であった。意味は通じるが、なぜこのような訳をしたのか疑問に思う人もいるだろう。ただし、このケースは間違いというよりは訳がどれほど上手くできているのかが肝心である。雛のつるし飾りを韓国語で訳すことは簡単ではない。最も相応しい表現にするさらなる努力が必要である。また、熱海では中国語の「熱烈歓迎」という表現をそのまま韓国語訳したものがあつた。熱烈歓迎の意味は分かるが、韓国人はとても違和感を感じる。

6. 他地域の韓国語表記や韓国の日本語表記はどうなっているか

静岡県と比較するため、県外でも韓国語表記についていくつか除いた。例えば、金閣寺のトイレの表示で「トイレを綺麗にご使用ください」を、韓国語で「綺麗」の部分がcleanを意味する語ではなく、prettyを意味する表現になっていた。東京スカイツリーの標示版では、「お帰りロビー」がハングルでは「帰還ロビー」という意味の訳になっていた。「帰還ロビー」と言えば宇宙から無事に地球へ帰還したようなニュアンスになる。韓国語表記をめぐる問題は本県に限らないことがわかる。このような間違いは解決できないような難しいものではないと思う。

逆に、韓国においてもこのようなことが存在する。自治体等の標示版ではないので、次元が違うが、釜山の飲食店においてコカ・コーラの炭酸飲料「ファンタオレンジ」、「ファンタグレープ」がそれぞれ、「オレンジ味所だ」、「ブドウ味所だ」と日本語表記されていて、こちらも意味が分からなかった。発音から類推すると、「オレンジ味ソーダ」と表現したかったところ、「ソーダ」を「所だ」とワープロ変換されてしまったのだろう。

7. 静岡県における韓国語版パンフレット類の問題

3回の調査から得られた韓国語版のパンフレットやリーフレットの類はとても多かった。しかし、観光案内所などでは韓国語のパンフレット類があるにも関わらず、観光客の手に届くところには置いていないケースが多かった。韓国語のパンフレットがあるか尋ねると奥から出してくれるような状態だった。確かに、韓国人の観光客が少ないということでわざわざスペースをとって置く必要はないかもしれないが、言葉が通じない韓国人の見えないところに置いてあれば、そのパンフレット類はお蔵入りのままで、何ら意味を成さないことになる。

パンフレット類は自治体が出すものと観光施設で出すもの(湯湯バスなど)があった。結論を言えば観光施設で出しているパンフレットの方が完成度が高く、自治体で作られたものは数が多いが、全体的に完成度が低かった(表記の間違いや直訳が目立つ)。もちろん、自治体側には理由はあるようで、予算が限られているため、プロの翻訳家等に頼めないという事情も聞いた。

中身を見ると完全にハングルばかり書いてあるものがあつた。非常に訳もしっかりしていて韓国人としてはとても助かるが、困る部分も存在する。例えば、「ペリーロード」に行きたいとき、周辺の人にパンフレットに書いてあるハングルを指しても日本人は全く理解できない。そのため、日本語の表記と併記することがより良いのではないか。また、同じパンフレットの中で、表記が統一されていないものもあつた。例えば、浜松の場合、ある部分は韓国の国立国語院方式の「하마마쓰」という正しい表記になっているのに、他の部分は「하마마츨」になっていた。翻訳をしたところが違うことによる違いかもしれないが、全体として再確認する作業を行っていないという証でもある。

8. 県庁韓国人国際交流員への意見聴取

日時：2014年1月30日(木)14:00~16:00

対象者：高橋 誠たかはし まことさん(静岡県観光政策課)、朱 城我ジュ ソンアさん(静岡県企画広報部地域外交課)

韓国語と日本語は似ているようで意味が微妙に違っている。その微妙な違いが、チェックしている側にわずかな違和感を感じさせ、その違和感を感じた箇所を訂正しようにもたくさん誤表記があつてはネイティブでも非常に難しく、時間がかかる。時間がないときにそのような修正箇所がたくさんあつると、少しの違和感があつても通さざるをえない。日本語を韓国語に翻訳するときに発生する問題の一つとして、日本語と韓国語の音の違いが挙げられる。例えば「ハママツ」の「ツ」という音は韓国語にはなく、人によって「・」と表したり「。」と表す。日本で規定されている表現は前者なのだが、音としては後者の方が日本人の発音に近いので、後者で表

す翻訳者もいる。つまり日本語の音をそのままハングルに当てはめようとするとき、翻訳する人によってどの文字にするか、基準が違っているということである。その基準を統一させるガイドラインがあれば誤表記は減るだろう。また、例えば「・・・(・)」は日本語表記で「アベカワ(川)」という意味であるが、・・(カワ)という意味が分からない韓国人のためにも(川)という表記があればより分かりやすくなるのではないか。

9. 調査研究に基づいた地域への提言

静岡県内での韓国語標識は思っていた以上に多くあり、韓国人観光客には非常に助かるであろう。したがって、量としての問題はないが、質の問題が問われるということになる。もちろん、標識をめぐる問題は本県に限ったことではないことは前述した通りである。それだけに、静岡県が一足先により正しい標識を作る原則を作れば、良い前例になることは間違いない。つまり、韓国語の標識をみておかしな表現だと笑われることにならないように、よりしっかりした標識作りに取り組むことは十分意味があることだと思う。

まず、標識もパンフレット類も表記のガイドラインが必要だと思われる。それはハングルに対する日本語表記法を統一することである。ケース1で分かるように韓国語表記が場所によって違うところがあまりにも多い。韓国語の発音に最も近い日本語で表記したい気持ちは分かるが、そうしてしまうと韓国の国立国語院で定めた日本語表記法とは食い違うところが生じる。したがって、一貫性がない表記になってしまい、観光客を戸惑わせることになるのだ。

次にケース2の場合はもう少し慎重に確認を行えば、このような間違いは減ると思われる。また、間違いを発見し、標識の修正が行われる際、修正する部分だけを確認するのではなく、全体をもう一度確認すればケース2は防ぐことが可能ではないかと思われる。

ケース3と4については、日韓両語双方の読みが混ざって分かりにくくなってしまったため、韓国語で「シモダコウエン(公園)」のように表記すれば非常に分かりやすいのではないか。

最後にケース5については、より理解しやすい表現を考え、表記するべきである。スペースが限られるため厳しい場合もあるだろうが、直訳で意味が通じないよりも、簡略で分かりやすいものにすべきであると思う。意味が分からない直訳の韓国語は何の意味も持たない。

いっぽう、熱海や浜松のような有名な都市には意外なほど韓国語の標識があまり無かった。このような都市の観光地において韓国語の標識はより必要とされる。逆に言えば、当初から正しい標識を作れる可能性を持っていると言ってよい。早急に取り組むべきだ。

パンフレット類の間違いも標識とほぼ同様である。何よりも量より質が大事だと思われる。パンフレットは量が多いが、その質に問題が多いのも事実である。自治体がパンフレット制作にかけられる予算には限界があるということだった。それならば、複数の自治体が共同で制作すれば、より完成度が高く、読む人も多くなるのではないか。また、文字ばかりのものよりは一枚でも写真を多く付けるほうが見やすく、理解しやすいパンフレットになると思う。

10. 自己評価

今回の調査で最も残念だったのは日本平、三保の松原、富士宮などの県中部の調査が十分ではなかった点である。また、個々の民間観光施設(土肥金山、沼津深海水族館など)の韓国語標識が確認できなかったため、次の機会があれば確認したい。本調査の実施前は、韓国語標識の誤りがこれほどあるとは考えていなかった。驚きと同時に、改善したいという気持ちも強くなり、言葉と観光の関係に非常に関心を持った。今回の調査によって誤表記が改善され、静岡県が良い手本となり外国人旅行客の旅が少しでも快適になれば良いと願っている。(了)

静岡県立大学国際関係学部小幡ゼミと旧富士川町との学術・地域文化交流に関する研究

静岡県立大学 国際関係学部 小幡研究室

指導教員：教授 小幡 壮

参加学生：森枝拓也ほか23名

1. 研究目的：

旧富士川町（現富士市）と本申請ゼミ（静岡県立大学国際関係学部・国際関係学研究科小幡ゼミ）との学術・地域文化交流を主たる目的とする。県立大学の学生には、地域の人々との交流に根ざした地域社会の理解が求められている。グローバル社会とは言っても、ローカル社会に対する興味・関心、そして理解がその基礎となることは言うまでもない。本ゼミは東南アジアの各地域の文化や社会を研究している。したがって、ゼミ学生は各自が関心を抱いている東南アジアの地域に関する研究を行っている。現代の日本と東南アジアの地域が抱えている諸問題には共通性がある。本研究テーマは、現代の地域社会の諸問題に対して、真摯に向かい合う機会となる。

また、本ゼミには多くの外国人留学生在籍しているが、彼らにとっては大学外・アルバイト以外の接点ともなり、日本社会の地域文化・歴史等を通じて一層、日本における留学生生活を充実したものになる。

旧富士川町と本ゼミの交流は20年近く継続しており、春と秋に定期的に交流の場を設けている。本研究は、この交流を発展的に継続していく目的がある。

2. 研究内容

1) 春の定例交流会（6月22日実施）。今年度は、旧富士川町の郷土史研究家を講師にお招きして、旧富士川町内を散策しながら旧東海道を歩きながら、富士川の河岸段丘によって形成された富士川町の街並みの様子や、一里塚、民俗資料館、そして小休み本陣常盤邸などを見学した。その後に伝統食（沖あがり）や「和食」を食べながら富士川町の歴史・史跡・文化に関する講義を受けた。ゼミ生は、地域の歴史を学ぶ意義について認識を新たにしようとした。また、留学生にとっては、江戸時代の東海道が果たしていた交通網の重要性について学ぶ機会になった。ゼミ側からは、高齢社会・車依存社会における地域社会の「まちづくり」に関する提言をおこなった。

2) 林間教室への参加（7月22～25日）。地元小学生の林間教室に留学生が参加して、国際交流と文化交流を図った。

3) 旧富士川町食育推進事業へ参加した（於、富士市南松野・松野まちづくりセンター、11月17日実施）。留学生による各国の料理作りを実演しながら、食文化を紹介して地域の

食育推進と食による国際交流に寄与した。留学生は、旧富士川町在住の外国人（インドネシア人、フィリピン人、ブラジル人、アメリカ人）と交流を図り、地域に密着して生活している外国人から多くの刺激を受けた。

本ゼミが提供した各国料理は以下のとおり。

- ①中国内モンゴル・東北部の水餃子ほか
- ②インドネシアの儀礼食（トゥンペンほか）、バリ島の伝統食
- ③ミャンマーの伝統食
- ④インドのカレー、チャパティ、チャイ
- ⑤スリランカのカレー

留学生は、レシピや食材の説明に加えて各国の食事情、特に食の伝統文化に関する住民からの質問に答えて、国際的な食育推進事業に貢献した。日本にはなじみのない、食慣行上の宗教的禁忌について説明して、食文化を比較する視点や、異なる食文化を尊重する必要性を説いた。

4) 秋の定例交流会（12月7日実施）。旧富士川町の住民を県立大学にお招きして、ゼミの研究成果（ゼミ成果、卒論・修論中間発表）に関する質疑応答を行い、学术交流を図った。また、「地元・地域学について考える」では、現在全国で取り組んでいる「地域づくり」に関する事例を紹介しながら、新しい地域文化創造について提言を行った。また、各国の「ふるさと」観について発表を行い、民族や文化によって「ふるさと」に対する考え方の相違について討論した。なお、詳細は別紙（資料1）を参照のこと。

3. 研究成果

地域社会と大学間の相互理解・交流の活発化が推進された。また、本年度の卒業論文提出者の中には、富士川町と関係が深い「富士山と竹取説話に関する研究」や食の国際交流や各国の伝統食から影響を受けて「食の無形文化遺産に関連する研究」を執筆した学生もいる。

4. 地域への提言：定例の交流会において、以下のような提言を行った。

1) 地元学のすすめ。地元について富士川町の住民がより深く理解する試みを提言した。具体的には、地域絵地図作りや地域資源マップなどを地域の子供たちと一緒に作成する試みを提言した。祖父母・父母・子供（孫）たちの3世代が協力して、地元理解を進めていく必要性について言及した。

2) 地域力の再発掘。地方における地産地消の取り組みを提言。具体的には、全国各地で実施されている取組について紹介して、富士川町においても実施可能な取り組みについて提言した。人と人との結びつきが地域の力を生み出す可能性について言及して、そのためには独創的で役所に頼らない自分たちで挑戦する姿勢が大切であることが強調された。

3) 学生による地域学実践。積極的に地域に飛び出して、地域の中に研究対象になるテーマを見つけ出して、授業の中での地域研究やゼミテーマとして研究する。卒論等に結び付けることもできるのではないかと提言がなされた。県立大学は、もう少し地域と密着した授業や研究をすべきではないか、との指摘もなされた。

4) 「ふるさと」の創生を提言。地域を盛り上げていくためには、地元の人々の活気と外から来た人の斬新な視点が必要になる。風土=ふるさとはその土地を守る人々と、そこを訪れる人々から形成される。内外の人々が地域に集まり、目的をもって一緒に何かをする=協働することが「故郷」創生につながるのではないか。具体的には、「ワークキャンプ in 富士川」の企画はどうであろうか。キャンプの中で地域の問題に取り組み、子供たちとともにワーク（体を動かし一緒に汗をかく）する、ワークショップの実施。外部の人を積極的に招いて、一緒に地域のことについて考え、外部の人が感じる地域の魅力を再認識する。来年度に、子供たちを中心にして、このようなワークショップの実施を提言した。

5. 地域からの評価

1) 春の定例交流会：多くの富士川町民が参加して、交流をおこなった。県大からも多くの学生が参加して、富士川の歴史を中心にして文化・学術交流をおこなった。富士川町の歴史・文化を留学生に分かりやすく説明することで、地域の見直し・再発見につながった。

2) 食育推進事業：留学生の各国料理に関しては上述したとおりである。留学生は、地域の食文化に触れる絶好の機会となり、また伝統食（餅料理など）を介して互いの食文化の相違点（各国の餅の搗き方の違いや食べ方の違いなど）や共通点（餅の重要性など）について学びあう機会となった。

3) 秋の定例交流会：上述したとおり、「地域づくり」についていろいろな提言を行い、質疑応答をした。その中で、若い学生の視点は新鮮であり、若者の意見として地域にとっては大いに参考になったようだ。また、留学生による各国の「ふるさと」観の紹介も大いに参考になった。

旧富士川町・県大小幡ゼミ合同ゼミナール

(資料1)

恒例の合同ゼミナールを以下の通り開催します。ふるってご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

開催場所：県大国際関係学部棟3314教室（第1部・第2部）、3413教室（第3部）

開催日時：12月7日（土曜日）、13時開始（12時50分集合）～

第1部 研究成果発表（13時～）

1. 卒業論文中間発表（順不同）

- 1) 丹羽沙織「富士郡姫名郷に伝わる竹取説話について」
- 2) 藤原直子「イスラームと邪視信仰」
- 3) 上原恭「トルコにおける喫茶文化」

2. 修士論文中間発表（順不同）

- 1) クマール ディーパク「ヒンドゥー教から仏教へ改宗する人々
ーブダガヤとガヤの改宗仏教徒の事例を中心にしてー」
- 2) 陳冬梅「内モンゴル東部における伝統的飲食文化の変容
ー白い・赤い食べ物から緑の食べ物へー」

第2部 地元・地域学について考える（15時20分～）

1. 基調報告（順不同）

- 1) 『地元学をはじめよう』を読む
- 2) 『地域学の構築ー大学改革の基礎ー』を読む
- 3) 『「ふるさと」の発想ー地方の力を活かすー』を読む
- 4) 『地域の力ー食・農・まちづくりー』を読む
- 5) 質疑応答

2. デスカッション（16時20分～）

- 1) 「ふるさと」の描き方
- 2) 各国の「ふるさと」観
- 3) 地元・地域学の可能性

第3部 交流会（17時～）

地域と大学の交流の可能性について

静岡県立大学にでかけよう。一緒に

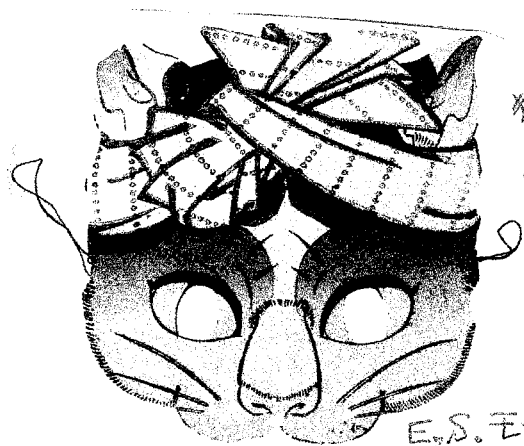
知る・聞く・語り合う

旧富士川町・静岡県立大学小幡ゼミナール

「卒論・修論発表、地元・地域学を考える」会

どなたでも参加できます

- 大学とはどんな感じのところ ◎ 大学での学びの実際とは
- ▽ 大学と地域の絆を深めよう ☆ 現役高校生歓迎



猫のお面
Cat mask

E.S. モース・コレクション



童女のお面 Little girl
mask

- 主催 「静岡県立大学小幡ゼミと旧富士川町交流の会」
- 世話人 太田哲哉（富士川地区） 佐野五十三（松野地区）
- 日程 2013年12月7日（土） 13時開始 静岡県立大学国際関係学部 3314 教室
- 集合 JR 富士川駅改札口・11時50分 11:59 発、静岡行に乗ります。
草薙下車、徒歩。バス・タクシーでも可
- 参加費 無料、ただし発表終了後、17時より県大生（留学生多数）との懇親会があります。懇親会参加の方は1,000円。
- 参加申込 佐野五十三携帯（090—~~9222~~—~~9222~~）11月30日までに。連絡・問合わせも。

静岡県浜松市の中山間地域における集落の現状と課題 ——浜松市天竜区春野町を事例として——

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 船戸ゼミ

指導教員：講師 船戸修一

参加学生：立花宝百合・中原僚介・平野実穂・丸山友葉（文化政策学科3年生計4名）

1. ゼミ活動の概要と目的

現在の浜松市は、2005年に12市町村による広域合併をもって誕生した。しかし、その合併市町村の中には、多くの山間部地域を抱える自治体も含まれていた。その結果、浜松市は、中山間地域を抱える政令指定都市となった。現在、浜松市の中山間地域は、天竜区に集中し、高齢化・一次産業の後継者不足・限界集落など深刻な過疎問題に直面している。

そこで「地域（農村）社会学」を専門とする船戸ゼミでは、3年生のゼミ生4人とともに、2013年9月から2014年1月まで月2回の頻度で浜松市天竜区の春野地域（旧・春野町）の集落に赴き、自治会長をはじめ自治会役員、地元女性、町外からの移住者、農業後継者など、様々な地域住民の方から集落の現状や課題についての聞き取り調査を行った。さらに、この調査は、春野地域の集落行事や祭りにも、教員も含めゼミ生4人全員で参加するという「参与観察」に基づいたフィールドワークでもあった。このように地元の集落と密接な関係性を構築し、地域住民の「信頼」を得たうえで中山間地域の集落の調査を進めるところに、ゼミ活動の特徴がある。また2014年2月には、春野地域における41ある自治会長宛にアンケート用紙を配布し、聞き取り調査ではフォローできなかった集落の現状や課題、自治会長としての住民意識なども明らかにした。

こうした聞き取りやアンケート調査による結果分析を踏まえ、2014年2月28日（金）19時から21時30分に現地（浜松市春野協働センター）において、集落の自治会長、地元女性、町外からの移住者、農業後継者など調査対象者ならびに行政職員（浜松市本庁や天竜区）など約130名を招き、調査報告会を開催する予定である（詳しい発表内容については最後のページを参照）。この報告会では、これまでの調査結果に基づき、春野地域の現状を分析するだけでなく、それを踏まえて今後の春野の地域づくりへの提言も行う。さらに、報告会で出された地域住民からの意見やコメントを踏まえ、調査報告書を3月に完成させる予定である。この報告書は、集落の自治会長、地元女性、町外からの移住者、農業後継者など調査対象者だけでなく、浜松市天竜区・区振興課や浜松市春野協働センターにも配布し、今後の浜松市における中山間地域の政策立案や市民活動に活かしてもらおう。このように調査によって得られた知見を地域にフィードバックすることを試みるころにも、ゼミ活動の特徴がある。

さらに、ゼミ生の中には、将来、浜松市職員への就職を希望している学生もおり、こうしたゼミ活動は学生の将来設計に向けた実践的教育手法としても役立つと思われる。

以上のように船戸ゼミの活動は、「地域（農村）社会学」という専門性やフィールドワークという調査手法を活かしつつ、調査結果を地域住民や行政（浜松市）に還元するという「大学・学生連携型の地域づくり」を目指すとともに、静岡県（浜松市）の中山間地域を支援する人材育成も企図している。

2. ゼミ活動の具体的内容

第1回 聞き取り調査

日時：2013年9月21日（土）～22日（日）

参加者：全員

聞き取り対象者：

21日・・・山下重夫さん（筏戸大上自治会長）ほか1名

・・・天野充康（五和自治会長）ほか1名

・・・田代常治さん（高瀬自治会長）

22日・・・鈴木扶（川上自治会長）ほか6名

・・・山下太一郎（杉第二自治会長）ほか4名

・・・大道正治さん（杉第一自治会長）ほか1名



集落での聞き取り調査の様子
(奥左から、平野、中原、丸山、立花)

この聞き取り調査では、春野地域においても、春野の中心から離れ、かつ標高の高い集落6つを選び、その集落の自治会長さんなどに集まっていたいただき、集落の現状や課題についての聞き取り調査を行った。この調査によって、集落人口が減少していること、高齢者の独居世帯が増えていること、高齢者の買い物環境が悪くなっていること、高齢化や後継者不足によって耕作放棄地が増えていること、空き家も増えていることなど、中山間地域の現状や課題を明らかにした。



「筏戸大上」自治会への聞き取り調査後
(奥は自治会の方々、
手前左から、丸山、平野、立花、中原)



「高瀬」自治会への聞き取り調査後
(奥は自治会の方々、
手前左から、丸山、中原、立花、平野)



「五和」自治会への聞き取り調査後
(奥は自治会の方々、
手前左から、立花、平野、丸山、中原)



「川上」自治会への聞き取り調査後
(奥は自治会の方々、
手前左から、中原、平野、立花、丸山)



「杉第二」自治会への聞き取り調査後
(奥は自治会の方々、奥右は池上重弘先生、
手前左から、立花、中原、平野、丸山)



「杉第一」自治会への聞き取り調査後
(奥は自治会の方々、
手前左から、立花、平野、中原、丸山)

第2回 聞き取り調査

日時：2013年10月6日（日）

参加者：船戸、立花、中原、平野

聞き取り対象者：池谷啓さん（平木集落に居住、春野へ移住し編集業を営む）

この聞き取り調査では、春野に移住されてきた池谷啓さんにお話を伺い、町外者（よそ者）から見た、春野地域の現状や課題を明らかにした。



池谷さんへの聞き取り調査後
（奥左から、池谷さん、平野、中原、立花）

第3回 聞き取り調査

日時：2013年10月13日（日）

参加者：船戸、中原、平野

聞き取り対象者：中林さん夫妻（久保田集落に居住、春野へ移住し、旦那さんは春野森林組合に勤める）

この聞き取り調査では、春野に移住されてきた中林さん夫妻にお話を伺い、町外者（よそ者）から見た、春野地域の現状や課題を明らかにした。



中林さん夫妻への聞き取り調査後
（左奥から、平野、中原、手前は中林さん夫妻）

第4回 聞き取り調査

日時：2013年10月20日（日）

参加者：全員

聞き取り対象者：鈴木るみ子さん（杉第二集落に居住、春野の女性加工グループの代表者）、宇野さん夫妻（大介さん・まどかさん）（砂川集落に居住、春野へ移住し有機農業を営む）

この聞き取り調査では、まず春野地域で農産物の加工品を販売している女性グループの代表者である鈴木るみ子さんにお話を伺い、中山間地域において農村女性が起業することへの意義や課題を明らかにした。さらに、春野に移住されてきた宇野さん夫妻（大介さん・まどかさん）にお話を伺い、町外者（よそ者）から見た、春野地域の現状や課題を明らかにした。



鈴木さんへの聞き取り調査後
（左から、立花、中原、平野、丸山、鈴木さん夫妻）



宇野さん夫妻への聞き取り調査後
（左から、立花、宇野さん夫妻、中原、平野、丸山）

第5回 聞き取り調査

日時：2013年10月27日（日）

参加者：船戸、中原、丸山

聞き取り対象者：桐澤千鶴さん（勝坂集落に居住、春野でかつて活動していた女性グループの代表）



勝坂神楽への参加

（左から、船戸、中原、丸山）

この聞き取り調査では、かつて春野地域でそば店を営む女性グループの代表であった桐澤千鶴さんにお話を伺い、中山間地域において農村女性が起業することへの意義や課題を明らかにした。なお、この調査を行う前に、年々踊り手の後継者不足に悩んでいる、地元の勝坂集落の祭りである「勝坂神楽」に教員（船戸）とゼミ生1人（中原僚介）で参加し、参与観察に基づくフィールドワークを行った。

第6回 聞き取り調査

日時：2013年11月10日（日）

参加者：全員

聞き取り対象者：森下亜希子さん（田河内集落に居住、春野の林業家と結婚された移住者）



森下さんへの聞き取り調査後

（左から、立花、平野、森下さん、中原、丸山）

この聞き取り調査では、結婚を機に春野に移住した森下さんにお話を伺い、町外者（よそ者）から見た、春野地域の現状や課題を明らかにした。また、地域の在住者とともにに行っている地域資源（梅などの加工販売）活用の取り組みについての話しも伺った。

第7回 聞き取り調査

日時：2013年11月24日（日）

参加者：船戸、中原、立花

聞き取り対象者：西野幸子さん（筏戸大上集落に居住、春野の女性加工グループの代表者）



西野さんへの聞き取り調査後

（左から、立花、西野さん、中原）

この聞き取り調査では、まず春野地域で農産物の加工品を販売している女性グループの代表者である西野幸子さんにお話を伺い、中山間地域において農村女性が起業することへの意義や課題を明らかにした。

第8回 聞き取り調査

日時：2013年12月8日（日）

参加者：船戸、平野

聞き取り対象者：尾上美智子さん（長蔵寺集落に居住、町内外から人を招き、庭でコンサートを開催する「オープンガーデン」に取り組んでいる在住女性）



尾上さんへの聞き取り調査後

（右から、尾上さん、平野、
夫婦で春野に移住してきた木下さん）

この聞き取り調査では、自宅の庭で「オープンガーデン」に取り組む尾上さんにお話を伺い、この地域活動の目的や地域に与える効果などを明らかにした。

第9回 聞き取り調査

日時：2013年12月15日（日）

参加者：船戸、中原、丸山

聞き取り対象者：山下光之さん（犬居集落に居住、農業後継者）、吉田克秀さん（和泉平集落に居住、田舎暮らしをするために春野に移住）

この聞き取り調査では、まず春野地域で実家の農業を継いだ山下光之さんにお話を伺い、中山間地域における農業経営の現状や課題を明らかにした。次に、春野に移住されてきた吉田克秀さんにお話を伺い、外部者（よそ者）から見た、春野地域の現状や課題を明らかにした。



山下さんへの聞き取り調査後

（左から丸山、山下さん、中原）



吉田さんへの聞き取り調査後

（奥が吉田夫妻、左から丸山、中原）

第10回 聞き取り調査

日時：2013年12月24日

参加者：船戸、中原

聞き取り対象者：栗崎貴史さん（農業後継者）、伊沢光興さん（和泉平集落に居住、農業後継者）

この聞き取り調査では、春野地域で実家の農業を継いだ栗崎貴史さん、山下光之さんにお話を伺い、中山間地域における農業経営の現状や課題を明らかにした。



栗崎さんへの聞き取り調査後
(左から、中原、栗崎さん)



伊澤さんへの聞き取り調査後
(左から、伊澤さん、中原)

第11回 聞き取り調査

日時：2013年12月27日

参加者：船戸、平野

聞き取り対象者：猿田光里さん（勝坂集落に居住、春野地域で訪問販売業「便利屋猿ちゃん」を営む）

この聞き取り調査では、春野地域で訪問販売業「便利屋猿ちゃん」を営む猿田光里さんにお話を伺い、中山間地域における買い物事情の現状や訪問販売業の課題を明らかにした。



猿田さんへの聞き取り調査後
(左から、平野、猿田さん)

第12回 聞き取り調査

日時：2014年1月13日（祝・月）

参加者：全員

聞き取り対象者：伊澤栄人さん（犬居集落に居住、個人商店「伊沢屋」を営む）、鈴木宏和さん（気田集落に居住、個人商店「大原屋」を営む）

この聞き取り調査では、春野地域で個人商店を営む伊澤栄人さん（伊沢屋）、鈴木宏和さん（大原屋）にお話を伺い、中山間地域における買い物事情の現状や商店経営の課題を明らかにした。



伊澤さんへの聞き取り調査後
(左から、立花、平野、中原、伊澤さん夫妻)



鈴木さんへの聞き取り調査後
(左から、立花、中原、平野、鈴木さん)

第13回 聞き取り調査

日時：2014年1月16日（祝・月）

参加者：船戸、中原

聞き取り対象者：山本奈々江さん（砂川集落に居住、夫婦ともに移住し、旦那さんは有機農業を営み、奈々江さんはお茶を使ったカフェ「茶空民」を営む）



山本さんへの聞き取り調査後

（左から、中原、山本さん）

春野に移住されてきた山本奈々江さんにお話を伺い、町外者（よそ者）から見た、春野地域の現状や課題を明らかにした。

自治会長へのアンケート調査

日時：2014年2月12日（水）に配布（2月19日締め切り）

調査対象者：全自治会長（41人）

春野の自治会長全員（41人）へアンケートを配布した。質問内容は、集落における町外からの移住者や空き家の状況、女性の地域活動への意識などを聞いた。37人の自治会長から回答を得た。

3. ゼミ活動の振り返りと展望

この活動を通じて、ゼミ学生が実際に浜松の中山間地域や農山村集落に足を運び、地元の人たちと交流しつつ、地域の暮らしや過疎問題について理解を深めることができた。こうした実体験に基づく知見は、学生にとって刺激となり、大いに勉強になるものであった。大学の講義では現実味を感じない話しも、実際の現場に赴き、現地の方から話しを聞くと、リアリティのある問題として捉えられる。また聞き取り調査では、逆に地元住民が学生に春野の地域づくりへの方向性を質問することもあり、その緊張感が学生に地域への自主的な学習態度を生み出した。さらに、調査報告会を通じて自分たちが調査・分析したことを聞き取り調査でお世話になった方々の前で発表しなければならなかったため、地域とかかわることへの真剣な態度も醸成させた。

一方、毎週のように春野に通い、地元行事への参加を通じて地域を学ぶ姿勢は、地元住民からも大いに歓迎された。また学生からの地域づくりへの提言は、地元住民にとって新鮮であり、有益なものであったようだ。

このように学生と地元住民の協働によって成り立つフィールドワークに基づくゼミ活動は、教育活動としてだけでなく、新たな地域づくりの手法としても有効であろう。

なお、来年度の3年生によるゼミ活動は、今年度の活動の経験や反省を踏まえたうえで、天竜区龍山地域（旧・龍山村）で行おうと考えている。今年度と同様、龍山の農山村集落を訪ね歩き、または龍山の地元行事に参加しつつ、地元住民への聞き取り調査を行う。そして年度末には、浜松市龍山協働センターにおいて地元住民を対象とした調査報告会を開催しようと考えている。

春野の暮らしの現状と今後の地域づくり

～文化政策学科・船戸ゼミ3年生「春野調査」報告会～

文化政策学部・文化政策学科の3年の船戸ゼミでは、1年間、浜松市天竜区の春野地域の農山村集落を訪ね歩きつつ、地元の方々へ聞き取り調査を行ったり、地元のお祭りに参加するなど、現地の暮らしや生活についてのフィールドワークを行ってきました。その調査結果を以下の日程で報告します。

【日時】

平成26年2月28日（金）午後7時から午後9時30分まで

【場所】

春野協働センター（浜松市天竜区春野町宮川1467-2）

【報告内容】

- | | | |
|-----------------------|----------|-------|
| ① 集落における生活支援の将来像 | 文化政策学科3年 | 平野実穂 |
| ② 農村女性たちの可能性 | 文化政策学科3年 | 中原僚介 |
| ③ ふるさとに通う子どもたち | 文化政策学科3年 | 丸山友葉 |
| ④ 移住者と集落とのかかわり | 文化政策学科3年 | 立花宝百合 |
| ⑤ 空き家へのまなざしとその利活用の可能性 | 文化政策学科講師 | 船戸修一 |

【料金】

無料

【申込み】

不要

【お問い合わせ】

静岡文化芸術大学

文化政策学部・文化政策学科 船戸修一

Tel/Fax：053-457-6170

E-mail：s-funa@suac.ac.jp

浜松市春野協働センター（担当：榊原）

Tel：053-983-0001

中山間地域活性化のための地域デザインに関する研究

静岡産業大学 情報学部 堀川ゼミ

指導教員：教授 堀川知廣

参加学生：ゼミ学生（3年生）○塩野フィリップ陽、○鈴木大地、榊原和真、築地宏幸、松浦大雅、
原祐貴

公募学生（1年生）上仲悠太、小松芳輝、杉山友也、滝弘佑

[要約]

島田市伊久美二俣地区に残る、江戸時代から明治時代にかけて建築された古民家及び明治期外国貿易のために建てられた銀行の建物を調査し、マップを作るとともに、二俣地区に残る樹齢100年以上の茶園の茶葉を、江戸時代前から庶民の茶として作られていた「番茶」の製法を再現し、古民家と番茶を活用した地域の活性化策を地元にて提案した。

[研究の目的]

島田市伊久美二俣地区は江戸から明治にかけ、当時最新の茶製造技術(手揉)を導入し、横浜港から米国へ向け盛んに輸出を行うことで、豊かな茶の生産地として栄え、輸出代金決済のための銀行の建物や当時の面影を残す古民家が残っている。しかし、現在、茶の価格が伸び悩み、二俣地区を離れる農家も多く、空き家となる屋敷もあり、美しい山里を元気にする方策が求められている。そこで、空き家となっている古民家に宿泊し、地域資源としての可能性のある古民家を調べ、マップ作りをするとともに、樹齢100年以上の在来茶園の茶葉を使い、煎茶製法が作られる前の番茶製法で「百年番茶」を再現し、古民家と百年番茶を活用した地域の活性化策を研究し、地元にて提案する。

[研究の内容]

1 研究の全体計画

8月19日(月) 伊久美二俣地区の調査計画づくり(大学で実施)

8月20日(火) 二俣地区の西野恭正氏、および同地区の古民家再生に取り組むNPO法人「伊久美楽山舎」の西野真氏、山下晋一氏から、二俣地区の歴史、茶業の概要、古民家の概要の講義を受けるとともに、古民家の調査を実施

8月21日(水)樹齢100年以上の茶園から摘み取った茶葉で番茶を製造

8月22日(木) 製茶した番茶「百年番茶」の試飲と、売り方の提案

12月14日(土)15日(日) 藤枝市駅前「まちづくり藤枝」で百年番茶嗜好調査

2 古民家調査・研究 「百年番茶」茶製造再現研究

(1) 二俣地区の古民家調査(8月20日)

ア 山下晋一氏の講義の概要

- ・古民家(伝統的な住宅)の構造(建築方法、間取りなど)、素材から見た古民家(壁、たたき、漆喰、畳など)
- ・木と古民家(近くの山の木を活用、柱50年生・梁70年生の木を使用、月の動きと伐採等)

イ 西野真氏の伊久美二俣地区の古民家講義と現地調査

- ・二俣地区の代表的な古民家・建築物(里屋敷茶部屋、西田邸、小学校を移築した茶工場、旧伊久美銀行など)を西野真氏の案内で現地調査

西野真氏、山下晋一氏から「古民家」の講義



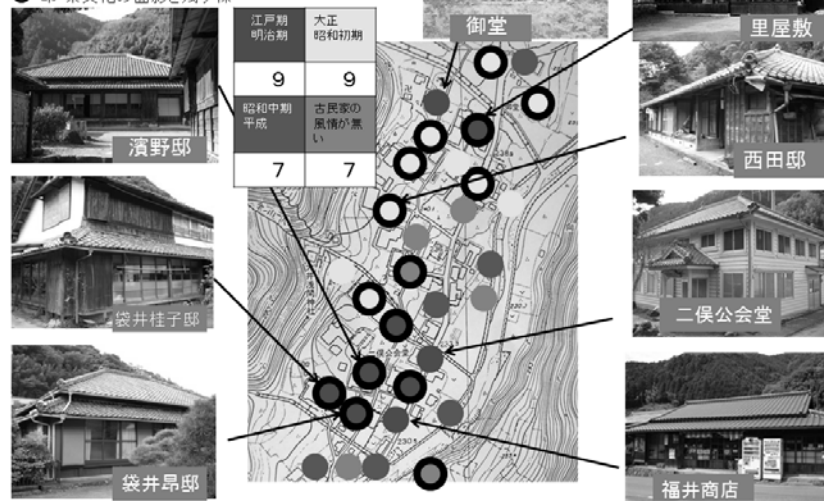
西野真氏の案内で古民家の歴史や構造を学ぶ



ウ 二俣地区の古民家マップ

二俣地区年代別家並図

〇 印 茶文化の面影を残す様



(2)「百年番茶」製法の再現調査・研究(8月21日、22日)

番茶の製法:京番茶(京都府)、阿波番茶(徳島県)の製法により、茶葉を沸騰した湯で茹で、天日で乾燥する製法で番茶を再現した。この方法は、戦後まで、県内でも、山茶を用いた番茶づくりに用いられていた。

再現した番茶製法

茶葉を枝ごと摘み取り⇒沸騰した湯で10分ほど茹でる⇒茹でた茶葉を天日で乾燥(6時間ほど)

⇒釜炒り乾燥 釜底の温度200℃で10~20分⇒百年番茶

樹齢100年以上の在来茶園で茶葉を摘採



大釜で茶葉を10分ほど茹でる



茹でた茶葉を天日で乾燥



出来上がった「百年番茶」



年齢	人数	好き	普通	それほどでも	コメント
20歳未満	14	2 14%	10 71%	2 14%	飲みやすい、いつでも飲める、食事中にもいい
20～59歳	19	9 47%	10 53%	0 0%	香ばしい、癖がなくて自然薬みたい
60歳以上	28	12 43%	13 46%	3 11%	紅茶っぽい、香りがいい、まずい(専門家)
計	61	23 38%	33 54%	5 8%	

学生の試飲評価(沸騰した湯で3～5分煮沸⇒熱い茶と冷やした茶の2種類を試飲)

茶の形	味・香り	水色	感想
葉の形がそのまま見てわかる 2	苦い・臭いが気になる 4	緑茶に比べ色が薄い 1	健康茶としてよさそう 5
茶に光沢がありきれい 2	口に残らずすっきり 4	緑茶と違い黄色で透明 2	味の改善が必要 2
見た目がよい 1	香りが少ない 2		冷やすと臭いが強くなる 3

(3) し好調査 12月14日(土曜日), 15日(日曜日)

場所は島田市駅前の「まちづくり藤枝」のロビー、対象は藤枝市民

百年番茶をホットプレート250℃で数分焙じ、5グラム/リットルを数分煮沸し、紙コップで試飲



- ・20歳未満は「好き」が少なく、「普通」が7割強。20歳以上は「好き」が約4割、「普通」が約5割。全体として9割の方々が「飲める」と評価。カフェインが少ない点を強調すれば、飲料として可能性があることが分かった。

(4) 古民家と百年番茶の活用策、地域への提言(学生の意見のうち主なもの)

古民家	百年番茶	提言
歴史博物館として活用	子どもの番茶作り体験教室	周辺の自然(山や川)や施設
山間地で暮らしたい人へ提供	百年番茶作りツアー	(ヤマメ平等)と連携
宿泊施設に活用	健康茶としてPR	SNSで積極的に広報
集落全体を古民家風にする	コラボ食品づくり	道路整備(道幅を広げる)
当時の生活スタイルに戻す	低カフェインを海外に広報	夏休みの大学生合宿募集
幼稚園の自然教室に活用	番茶の特産地として売り出す	ウォークラリーコース設定

3 研究の成果及び地域への提言

- 古民家の現地調査を通して、中山間地域である伊久美二俣地区の茶業の発展と地域の暮らしが密接に関連していることを現地に暮らす人たちから学ぶことで、本県の中山間地域の置かれている現状を理解するとともに、百年番茶の再現製造により茶づくりの原点を体と頭を使って体験研究できたことが、本研究を実施して学生が最も学んだ点であった。
- 二俣地区は、古民家や百年番茶以外にも、豊かな自然、豊富な山菜、老人の豊かな知恵などがあり、これらを活用して、多くの方々、特に若者が、体験教室やツアーなどで訪れることが、地域の活力アップにつながることを、この研究を通じて、提言できた。
- 空家となっている古民家に全員が宿泊し、自炊しながら、昔の人たちの暮らしを体験できたことで、座学で学ぶ以上のことを学ぶことができ、地域住民と接し、住民の考え方を膚で感じ取り、古民家や百年番茶の活用用法や地域への提言も実現可能な内容とすることができた。

平成25年度

ゼミ学生地域貢献推進事業成果発表会

大学ネットワーク静岡では、地域の課題解決に取り組むゼミ学生の活動を支援する「ゼミ学生地域貢献推進事業」を本年度から実施しています。

このたび、学生・大学関係者、地域の方々との意見交換、地域への情報発信を目的として、今年度事業に採択された12件のゼミ学生による成果発表会を開催します。

日時
平成26年
3月5日(水)
13:00 ~ 16:00

会場 **B-nest 静岡市産学交流センター6階
プレゼンテーションルーム**

(静岡市葵区御幸町 3-21 ベガサート)

定員 **学生・大学関係者、
一般県民など(100名)**

参加費 **無料**
事前申込み不要
当日直接会場へお越しください。

主催 **大学ネットワーク静岡**



平成25年度採択事業

静岡英和学院大学

人間社会学部 岡部ゼミ

古民家再利用による地域ネットワーク推進活動

静岡県立大学

国際関係学部 小針ゼミ

県内観光地における韓国語標識・印刷物の問題点に関する研究

静岡県立大学

国際関係学部 小幡ゼミ

旧富士川町との学術・地域文化交流に関する研究

静岡県立大学

経営情報学部 国保研究室

草薙地域コラボプロジェクト

静岡産業大学

情報学部 堀川ゼミ

中山間地域活性化のための地域デザインに関する研究

静岡大学

教育学部 塩田研究室

清水駅前銀座商店街と連携した「お仕事体験プログラム」の実施と普及

静岡大学

理学部 北村ゼミ

伊豆半島南部で過去1500年間に起きた大地震の研究

静岡文化芸術大学

文化政策学部 船戸ゼミ

浜松市の中山間地域における集落の現状と課題：浜松市天竜区春野町を事例として

静岡理工科大学

総合情報学部 三原研究室

地域特産品ブランド・エクイティ構築要件に関する研究—ブランド化成功事例調査と袋井市のSWOT分析—

常葉大学

法学部 柴ゼミ

地域活性化—商学連携による大学とまちのつながりの創出

日本大学短期大学部(三島校舎)

食物栄養学科 室伏ゼミ

伊豆市月ヶ瀬梅組と連携した新たな梅製品の開発

浜松学院大学

現代コミュニケーション学部 土倉ゼミ

学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究—対話を通じた科学に関する学びに焦点をあてて—

発表順については、
ホームページをご確認下さい

大学ネットワーク静岡

〒420-0839 静岡県静岡市葵区鷹匠 3-6-1 もくせい会館 2F 電話番号：054-249-1818
ホームページ：<http://www.daigakunet-shizuoka.jp>

ゼミ学生地域貢献推進事業 成果発表会

次第

日時:平成 26 年 3 月 5 日(水) 13:00~16:00

場所:B-nest 静岡市産学交流センター6階 プレゼンテーションルーム

- 13 : 00 開会
- 13 : 10~13 : 45 発表 (4 団体)
1. 静岡英和学院大学 人間社会学部 岡部ゼミ
 2. 静岡県立大学 経営情報学部 国保研究室
 3. 静岡大学 教育学部 塩田研究室
 4. 常葉大学 法学部 柴ゼミ
- 13 : 45~13 : 55 質疑応答 (4 団体)
- 13 : 55~14 : 30 発表 (4 団体)
5. 静岡大学 理学部 北村ゼミ
 6. 静岡理工科大学 総合情報学部 三原研究室
 7. 日本大学短期大学部 (三島校舎) 食物栄養学科 室伏ゼミ
 8. 浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 土倉ゼミ
- 14 : 30~14 : 40 質疑応答 (4 団体)
- 14 : 40~14 : 50 休憩
- 14 : 50~15 : 25 発表 (4 団体)
9. 静岡県立大学 国際関係学部 小針ゼミ
 10. 静岡県立大学 国際関係学部 小幡ゼミ
 11. 静岡文化芸術大学 文化政策学部 船戸ゼミ
 12. 静岡産業大学 情報学部 堀川ゼミ
- 15 : 25~15 : 35 質疑応答 (4 団体)
- 15 : 35~15 : 50 まとめ
- 15 : 50 閉会

【交流会】

16 : 00~17 : 00 出席者による意見交換・交流

主催 : 大学ネットワーク静岡

運営協力 : NPO 法人静岡時代